

Just Another Life

For adult only

mechi

Contents

scratch	3
Hummingbird	38
アクアブルー	65

このたびは、当同人誌を
お手にとっていただき、誠にありがとうございました。
お手にとって読みたいと思っていただき、ありがたく思います。

この本は、2022 年に発行した同人誌を受注頒布用に整えたものです。
お楽しみいただけましたら幸いです。

scratch

双子の弟のハリーの訃報が入ったのは、グレイの空に晴れ間がぼつぽつと増え始めた3月の頭のことだった。

僕らの他に、兄弟姉妹はいない。突然のことに両親は悲しみに暮れ、僕は葬儀などの対応に追われざるを得なかった。

葬儀の数日前、ハリーは、ロンドンからここ、カーディフの生家に帰った。棺の中には、確かに僕の弟が眠っていた。モーターウェイでハンドルを切りそこねてクラッシュしたという。遺体特有の顔の蒼さより、左の額から側頭部にかけて、傷を覆い隠す包帯の白さばかりが目についた。明るいブロンドに染められた髪を眺めながら、おしやれや身だしなみに余念がないヤツだったからな、とぼんやり思い返した。

僕と同じ顔の遺体を前にして、僕は、ハリーが死んだ事実を飲み込めずにいた。

一卵性の双子の僕らは、顔や体型こそ瓜二つだったが、

性格や趣味嗜好は少しずつ違った。

勉強は同等だったが、僕より少しだけ運動ができ、少しだけ外向的で、意欲的な野心家だったハリーは、小さい頃から人気者だった。

僕だって、決して出来が悪いわけじゃない。それでも、彼より少しだけ内向的で控えめな僕は、そのつもりはなくとも、いつでも彼の引き立て役だった。

だからといって、弟をひがんだり、疎ましく思ったことはない。

僕らは、ごく当たり前に、顔貌は同じでも他人であり、その違いを尊重することを知っていたし、彼は彼、僕は僕という単純なルールを忘れなければ、誰よりも仲良く、互いを理解できる友人でもあった。

* * *

ハリーの葬儀の当日。

僕らの祖父や曾祖父も埋葬されている教会には、たく

さんの人が集った。半分は僕らをよく知るこの町の面々で、残りの見知らぬ顔ぶれは、ロンドンからわざわざ駆けつけてくれたに違いない。

どこにいても、ハリーは人好きのする、チャーミングなヤツだったんだろう。今となつては、すっかりロンドンの人だったから、あつちで葬儀をするべきだったんじゃないか…。

聖書の引用を読み上げる神父を眺めながら、僕は、僕がよく知り得ない弟に想いを馳せていた。

高校まで共に過ごした僕らは、その先で大きく進路を分けた。僕は地元の大学に通い、ハリーは大学進学と共にロンドンに出て、そのまま戻らなかった。

彼は当時、ベンチャー企業だった大手通信会社の起業に携わり、今ではCMOなんて役職を任されていた。(だから、彼の計報はちよつとしたニュースになった。)ハリーのSNSや、ごくたまに寄越される連絡で知り得る限り、彼は成功したビジネスマンで、精力的に働

き、遊ぶ、順風満帆の人生を歩んでいた。年に数度、帰省してもいつでも忙しくしていたし、クリスマス休暇ですらロンドンで過ごすことも珍しくなかった。(それでもマメにクリスマスカードやプレゼントを贈つてくるのは彼らしかった。)

だから、双子であり、最も理解しあえる友人といえ、社会に出てからのハリーの個人的なことは、実際、よく知らなかった。

僕は僕、彼は彼。必要なことは共有して、余計な詮索をしてこなかったから仕方ない。

けれど、気づけば遠く離れていた弟との別れがこんなにも突然訪れるなんて、やつぱりうまく理解できない。

叔父に肩を叩かれて、我に返った。気づけば幾人かのスピーチが終わり、次は僕の番だった。立ち上がり、棺を横目に前に進み出る。

花々に埋め尽くされた弟の顔は、苦しくも安らかにも見えず、直視する気になれなかった。

振り返り、参列者を見渡すと、僕を知らない人達が少しざわついた。僕らは本当に似ているから、驚かれても仕方ない。

ざわめきが収まるのを待つて、口を開いた。

「ご覧の通り、ハリーは僕の愛する双子の弟で——」
とまで言いかけて、後方の見知らぬ青年に気づいた僕は、言葉を失った。

その人は、僕を驚愕の顔で見つめていた。

瞬間、息も止まるほどの、甘い衝撃。

彼を知らないはずが、知っている。懐かしいような、切ない憧れ。

ビリビリと胸を締め付ける疼きに、僕は、用意していたスピーチの内容が全部飛んだ。

ハリーと僕の思い出を幾つか語ったが、何をどう喋ったのかよく覚えていない。

あの人の見開いた目から、視線を外すことができない。辛くなりすぎないよう、ユーモアやジョークで皆のクスクスとした笑いを誘えても、あの人は変わらず、信

じられない、そんな顔で僕を見つめ続けていた。

僕も、信じられない。まさか、この場に全くふさわしくない「一目惚れ」に、我を忘れそうなほど動揺しているなんて。

「ハリーの最高の姿を忘れないでください」とスピーチを締めくくると、それまで微動だにしなかったあの人は、小さく開いていた唇をぎゅつと結んだ。

彼からなんとか視線を引き剥がした僕は、棺を覗かずに席に戻った。

式次第が終わり、参列者がそれぞれ弟に最後の別れをするために列を作った。

最後尾にいたあの人は、親族を除く誰よりも憔悴し、悲しみに打ちひしがれていた。そして棺を覗き、ハリーの頬を撫でて何かを呟いた横顔は、誰よりも慈愛に満ちて、優しかった。それは、血を分けた僕よりよっぽどハリーの近くで寄り添い、そして想像もできないほど親密な時間を過ごした者にしかできない顔だった。

嗚呼、彼は、弟の恋人に違いない。

全てを察した僕は、辛く残酷な現実から目をそむけた。

* * *

ハリーが茶毘^{だび}に付された後、参列者達は思い思いに繁華街のパブに向かった。

僕は両親の住む生家に戻り、片付けや葬儀屋の対応などに追われた。

一段落した宵の口、スマホには古い馴染みから「いつものパブにいるから来い」とメッセージが入っていた。親族を代表して一言でも挨拶するのが筋だが、両親は変わらず塞ぎ込んでいて、結局僕が対応するしかなかった。

弟が死んだというのに、受け止めるために一息つく暇もない。このまま、義務と日常に流されているうちに、過去のこととして過ぎ去っていつてしまうのだろうか。

コートを羽織って外に出ると、陰鬱な小雨が冷たく頬を濡らした。

いつものパブに着くと、すっかり日が暮れていた。

町で一番大きなこのパブは、このような機会にもよく使われる。店主は僕を見るとお悔やみを述べ、黙っていつものエールをパイントしてくれた。

客の8割は葬儀の参列者達で、ほとんどがこの町の者だった。今日も明日も平日で、ロンドンから来た人達の多くが既に帰路についたのだろう。ざっと見渡してもあの人の姿はなく、ほっとした気持ちの裏で、ぼつりと渗む寂しさをアルコールで飲み干した。

端のテーブルから順に挨拶と雑談をし、見知らぬ顔がいればハリーとの関係を聞き、今日までの感謝を伝えて周った。

挨拶をし終えると、どつと疲労を覚えた。どこかのテーブルに加わる気になれず、カウンターに掛けると、店主が「これはおごりだ」とエールのおかわりをくれた。

「ありがと、嬉しい」

グラスに手を伸ばした時、背後から「隣、いいですか」と声をかけられた。聞き覚えのない声を、作り笑いであしらう気力はなかった。

少し、そつとしておいてほしい。そう言うつもりで振り返ると、あの人がいた。

「…っ！」

驚きのあまり、声が出なかった。ドキドキと震える心臓を落ち着けたくて、冷えたグラスを掴む。葬儀の時のように強く捕われた視線を外せずにいると、見上げた彼は微かに笑い、僕の返事を待たずに側のスツールに掛けた。

「デイヴィッドといいます」

静かに名乗った彼は、店主にギネスとチップスをオーダーした。

彼は長いこと外にいたのか、濡れて束になった髪が力なく額に落ちていた。印象的な目元は、髪色と同じ、ブラウンの瞳がきれいだ。斜めった細い鼻筋や、黙っ

てたら不満気な下唇すら、可愛げに見える不思議な魅力がある。悲痛に塗りつぶされていなければ、きつと見惚れるほど愛らしいに違いない…。

なんて、まるで品定めでもするように見入っていた自分を、恥ずかしいと思う。

「…僕は、マイケル——」

「ハリーのお兄さん、ですね」

大きな瞳が寂しく陰るのが見えて、僕は不躰に見つめ過ぎていた視線をカウンターに戻した。

「そう、今日…来てくれてた、よね——」

「僕は、ハリーと付き合っていました」

「そつ、か…」

デイヴィッドの告白に、安堵していた。個人的なことに触れるのはまだ早いと思つたし、何より、彼への好意を自覚した今、ふたりのことを自ら詮索する気にならなかった。

そして、何を話すべきかわかりかねて黙り込んだ僕に、彼は不安を覚えたようだった。

「…ハリーは、僕のこととは…？」

「…ああ、『最高の恋人がいて、人生バラ色だ』って、たびたび自慢してたよ」

「そうですか…」

ほつとしたのか、疲れた横顔が緩んでいく様に、僕は、思わず見入ってしまう。

「頻繁に連絡を取り合ってたわけじゃないし、お互い必要なことしか言わないから、詳しくは知らなかったけど…」

「…」

「それでも僕らは仲がよかったんだよ、ただ——」

「付かず離れず、いい距離だったんですね」

ギネスを舐めた唇の口角が上がって、また、目を奪われる。

「…そう、思う」

「ハリーは『双子の兄がいる、僕と違って堅実で、真面目で、信頼のおけるヤツだ』って、言ってたよ」

「そつ、か…」

彼の言葉に、浮つく胸が痛んだ。信頼のおけるヤツは、弟の恋人に横恋慕なんかしないだろう。

黙り込んだ僕に、デイヴィッドはさり気なくチップスの皿を押して勧めた。

食欲はなかったが、一つ頬張ると、彼が塩とビネガーを振ったそれはとても美味かった。

「だから今日は、とても驚きました」

「？」

「あなたが、本当にハリーにそっくりだから…」

目を細めて、懐かしむように僕を見つめる彼に息が詰まる。柔らかなその笑顔は、弟に向けられたものだと思われる。わかっている、高鳴る胸を抑えることはできない。

顔が赤くなつた気がして、僕は慌ててエールを煽った。酔いのせいだと誤魔化せていたいと思いつつ、話題を変えた。

「…それで君は、外で、何か用事でも？」

盗み見た彼は「ああ」と苦笑して、濡れた前髪をラフに掻き上げた。オールバックになった彼は突然男らし

さが増し、度肝を抜かれるほど凜々しい。

「どうやら、デイヴィッドは僕の『タイプ』らしい。」

認めざるを得ない甘く苦い感情を、喉で弾けるアルコールが増幅する。

「いえ、ワイワイ飲む気にならなくて、あなたもいなかったし…ハリーの育った町を見てみたくなって――」

「雨なのに――」

「明日は、昼前には帰るから…」

「…」

「戻ってきたら、あなたがいたから…よかった」

「っ…」

沈痛な面持ちが一転、屈託のない笑顔になって、僕はもう、彼から目を離せなくなる。

「…場所、変えませんか？」

「え？」

「もう少し、静かに話せるところがいい」

気づけば、店内は随分賑やかになっていた。振り返る

と、酒が進んだあちこちで笑いや歓声が上がるそこは、もはや故人を偲ぶことなどとうに忘れ去っていた。

「…そうだね、それがいい」

断る理由もなく、デイヴィッドに着いてパブを出た。

* * *

雨はやみ、夜のネオンは薄靄に霞んでいた。

デイヴィッドは、駅前のマリオットに宿を取っていた。

パブからのんびり歩いても10分弱。「ラウンジにバーがあったから」と誘われるまま従ったが、肩を並べる

のは気が引けて、少しだけ距離を取って歩いた。

道すがら、デイヴィッドは、思い出したように軽く自己紹介をした。僕とハリーの2つ年下で、証券会社に勤めていると言う。

ロンドンでのふたりは、誰もが羨む華やかなカップル

だったかもしれない。彼らの姿を想像すれば胸がチク

リとして、それ以上考えるのをやめた。

そして僕は、地元の国立博物館で学芸員をやっていることを話すと、彼は目を細めた。

「想像もつかなかったな」

彼が、ハリーから想像していた僕は、どんな感じだったのだろう。

「僕は、多少、保守的なんだ——」

「何も悪いことじゃない、僕の顧客にだっていっぱいいるよ」

少しずつ碎け始めた彼の言葉尻は、恐らく酔いのせいではなく、それを僕は、嬉しいと思う。

「あなたは、確かに、ハリーと全然違うみたいだ」

「…昔から、よく言われてた」

「面白いと思う」

デイヴィッドはニコリと笑い、僕の背を押してホテルのエントランスへ促した。

夜も更け始めた頃合い、マリオットのラウンジにあまり人はいなかった。

隅のソファー席に収まると、デイヴィッドは「少しでも何か腹に入れたほうがいい」とサンドイッチをオーダーした。「食欲はないだろうけど」とチーズと生ハムの盛り合わせを追加で頼んだ彼は、自分こそ辛いはずなのに、気遣いのできる人だと思う。

彼はスコッチをロックで、僕はジントニックで。フールドを待ちながら思い思いに酒を飲んでいると、デイヴィッドは僕の飲むペースが遅いことに驚いたようだった。

「あなたは、アルコールに逃げたりしないんだね」

彼は「僕は飲むよ」と肩を上げ、ぐいとグラスを飲み干した。

「僕だって飲めるけど、ハリーみたいな飲み方はしないよ——」

「バカスカ飲む人だった」

ぱくりとオリーブを頬張り、恋人を懐かしむ彼の目は遠くを眺めている。

僕の意を察してか、それとも感傷に浸りたくないのか、

ハリーとの具体的な話を明かさないデイヴィッドを、
ありがたく思う。

そして自然と話題は、僕と弟の思い出と、互いの個人的なことが中心になった。

「僕とハリーは趣味嗜好も似てたけど、いつもその先が大きく違ってた」

彼は「先？」と小首を傾げ、少しだけ身を乗り出した。その興味は、弟へのものだ。淡い期待を、ジンのおかわりで飲み干した。

「…例えば、僕らはカーデイフ城に連れて行ってもらうのが大好きだったけど、ハリーはそこで史劇を演じる役者達に憧れて、僕は歴史そのものに興味があつた」
小さく微笑みを浮かべた彼を、つい目で追ってしまふ。何を望むわけでもない、デイヴィッドが近くでくつろいでいるだけの、ささやかな幸せに酔えるだけでいいと思う。

「快活で、楽しいハリーは、人気者だった」

「…わかるよ」と目を細めた彼は、一つ息について「聞

いていいかな？」と遠慮がちに口を開いた。

「何？」

「マイケル…あなたは、その、誰か…いるの？」

ちらと僕を伺ったデイヴィッドは、初めて彼から先に視線をそらした。

そして僕は、初めて名前を呼ばれたことに、自分でも驚くほど動揺していた。

「誰かって——」

「恋人」

「…いるよ、彼女」

「そっか、よかった」

彼はほつとしたように笑い、グラスの残りを飲み干した。

「？」

「こういう時は、支えになる人が必要、でしょ…？」

デイヴィッドの柔らかな眼差しに、胸が苦しくなる。そういう人を失った彼にどう答えればいいのかかわからず、僕は、苦し紛れに話を変えた。

「…デイヴィッド、君は…泣かないんだね」

「まさか、昨日までさんざん泣き崩れてた…」

「…」

「けど、今日は知らない人もいるから、余所行きの鎧を被ってるだけ」

くしゃ、と無理に笑った顔は、とても、とても痛々しかった。

「…そう言うあなたこそ、泣かないんだね」

酔いのせいかな、彼にわかつてほしかったのか。

考える前に口をついていたのは、これまで、誰にも言わずにいた僕のことだった。

「…正直言う…今でも、弟が死んだって実感が無いんだ」

「…」

「だからかな、彼女に会いたいのと思わない…」

「…」

「…なんにも現実味がない、全部嘘で、騙されてるんじゃないかって、思う」

「……………」

彼は、僕の言葉を静かに、そして真剣に見つめていた。

「…こんな、こと——」

「マイケル…」

「…」

「…あなたというと、僕もそう…思えるよ」

その微笑みは、昼間、彼が最後に弟に捧げた優しいそれに、とてもよく似ていた。

ただそれだけで救われた気がして、僕は、僅かにも笑えた。

「笑った顔も、そっくりだ」

「…笑うとか、忘れてた」

苦笑いを返すと、ふいに、デイヴィッドは改まって僕を見つめた。

「マイケル」

「うん」

「…少しか、頼みを聞いてほしい」

おもむろに腰を上げた彼は、「来て」と目で僕を呼んだ。

腕時計を見ると22時を過ぎ、既にラウンジには僕らしかおらず、スタッフがクローズ準備を始めていた。残念ながら、お開きだ。ほんの少しでも、彼と話せてよかった。

寂しさと甘酸っぱい気持ちを胸にしまいながら、彼の背を追う。

デイヴィッドは会計カウンターに「部屋付けで」と頼むと、ホールを突っ切つてエレベーターに向かった。

* * *

デイヴィッドの言う「頼み」は、弟の遺品を渡されるとか、そういうものだと思っていた。

彼の部屋まで着いて行き、彼がドアを開けたところで、僕は大事なことを思い出した。

「あの、デイヴィッド…」

「？」

「ごめん、すっかり忘れてた」

振り返った彼に、精一杯の笑顔を作った。

デイヴィッドは僕より3インチほど背が高い。

こんな距離で、幾度となく見上げたはずの弟の気持ちを味わいながら、苦い恋を忘れるつもりで言った。

「今日は、葬儀に来てくれて、本当にありがとう」

「…そんなの」

寂しい微笑みから、目を離せない。僕に伸びた長い腕に抱き込まれるのを、夢心地で見っていた。やむなく触れ合う頬の温もりに、息が詰まる。終わらないハグを数える鼓動は早く、別れを惜しんで彼の背をタップした。

「…デイヴィッド？」

顔を上げると、彼は待ち構えていたように僕の唇を唇で奪った。

いけない。そう開けた唇に、彼の舌が滑り込む。

でいぐいっど。呼んだつもりで舌を吸われて、「あ、声になったのはぬるい溜息だった。」

その時、どこかでガタンとドアが開く音がして、焦つて彼の胸を突き放した。後ずさる間もなく強い力が腕を掴み、ドアの奥に引きずり込まれる。流れるように抱き締められ、封じられる唇と拒否。壁に押さえ付けられて、先程より乱暴に舌を注がれる。

もうやめろ。彼の肩を押し返した手も、壁に押し付けられて為す術もない。

ふいに唇を離した彼は、額に額を押し付けて僕の動きを封じた。

「ど、して、こんな、いやだ——」

「どうして……」

息を殺した口元を、乱れた吐息が多つていた。顔が近すぎて、その目が見えない。それでも、確実に僕を抑え込む意思で、彼がシラフだとわかる。酔つていた、は言い訳にならない。

「……こんな、ふきんしんな——」

「何も、考えないで」

低く、甘い誘惑が唇に潜り込む。

僕を解いた腕に強く腰を抱かれ、左頬を長い指になだめられる。

本当に、ハリーが死んでから、ずっとずっと現実味がない。葬儀では馬鹿げた一目惚れをして、その夜には弟の恋人と抱き合っている。

まるで、シナリオが用意されているかのように、彼に囚われていく。

僕は、彼の首に腕を回して、僕を貪る舌を啜った。

長い間、しがみつくように唇を奪い合っていた。

彼を受け入れて今更に気づく、強い酒のフレーバーと、スパイシーウツディの甘く冷たい香り。

弟が愛した男が染みつく背徳感に顎を引くと、彼はより深い口づけを僕に求めた。

「……男とは初めて？」

頷いて、見上げた唇は僕らの唾液で汚れている。

僕を知り尽くしたような舌に、思考を吸い取られてい

く。頬を取られ、注がれた唾液を飲み込むと、彼の唇が深く笑った。

口づけに溺れているうちに、ジャケットとシャツを脱がされていた。ひんやりとした外気を感じて、この先に待ち受けているものを、ふいに恐ろしいと思う。

「だめだ、いけない——」

「どうして…」

「こわい——」

「怖くない」

我に返った僕の額からまぶたに、慣れた男の口づけが落ちる。

「よこれてる——」

「構わない」

「いや、だつ…」

昼間、弟に触れた指が、僕の左胸を探る。

熱を帯びた肌と、胸に秘めた昂奮は、隠すことができない。

「わかった」

再び僕は口づけを重ね合い、互いの服を剥ぎながらバスルームに辿り着く。

シャワーの下で、裸で抱き締め合っている。

重ねた肌で知る体はお湯より熱く、腹にめり込む彼の男根は更に熱く、硬い。

「…マイケル」

「…っ」

耳を喰み、名前を囁かれるだけでカラダが火照る。焦れる昂奮を彼になると、彼は唇を僕の胸に落とした。羽が舞うほどの軽さで、乳首の先を舌と指が弾く。

「っ」

僕を見上げる舌が笑い、うねって、声を殺す僕を煽る。

「う…」

揉みしだかれて、つまみ出されたそこを、力を込めた愛撫が捏ねる。

「ん、アッ…」

こんなにきもちいいのか。未知の快感を知ったカラダは、淫らな欲求に従順になる。

彼の頭を抱いてペニスを胸に擦りつければ、彼は心得たようにキスで下腹へ辿り、躊躇なく僕をその唇に吸い込んだ。

「あ、あ…」

器用な舌が優しく僕を舐り、長い指が荒つぽくサオをしごいている。

女性とのそれとは別モノの快感は、男同士だからか、それとも彼だからか。

強く吸われて先走りがこぼれ出すと、彼はねじるように僕を絞り、絡める舌で衝動を誘った。

「…ア、はッ……」

熱いものを放つ快楽に膝が抜け、たまらず壁に背を預けた。一度、二度、強く吸われて、彼が精液を飲んだのがわかる。

「…は、あッ…」

残滓を丁寧に吸った彼は、僕を見上げてうつとり笑った。そして僕から口を外すと、見せつけるように亀頭を舌の上で転がした。

崩れていく思考の端で、悪魔のような男だ、と思った。舌と指を這わせ、ゆつくり僕の体を這い登る彼に、戻れない所へ引きずり降ろされていく。

そして彼は僕の背に回ると、背後から伸ばした手でくたびれた僕を握り込んだ。

「ア…」

「自分で腰振って」

耳元の誘惑は、低く甘い。僕を待つ男根が尻の窪みで上下して、腰から背にぞくりと高揚が走る。彼に合わせて腰を揺らすと、彼は興奮の渗む吐息を僕の耳に吐いた。

無心で、彼の手の中でペニスを滑らせていた。骨ばった節に擦れて、萎えた海綿に血が戻る。カリ首をくすぐり、裏筋をなぞる指先に翻弄される。早まる腰を伺

いながら、彼は腰を振る僕の逆にはサオをしごく。

「あ、ア、きもち、いッ…」

天を仰いだ唇を、強引に唇で塞がれる。乱暴にねじ込まれる舌で、僕の精液の味を知る。伸ばした舌を絡め取られ、息ができない。

「…ん…ぐッ…うっ…！」

強い恍惚に、ぶれた視界が白く塗りつぶされる。

ぐぶ、と異物がアヌスを割る痛み到我に返った。

「え…」

腕ごと抱え込まれて、身動きができなかった。

やみくもによじる腰の隙に、彼は容赦なく腰を突き上げる。

熱く、硬いオスに尻を拓かれる痛みに、彼の腕に爪を立てることしかできない。

「あ！やめっ、あ…あつ！…だっ…アアッ」

「おおッ…」

声をあげると尻が締め、体内の男根を否認なく締め

上げた。ほんの僅かな滑りだけで、一方的な情欲を受け入れてしまうカラダが悔しい。

「ん、ぐ…っ、う…」

奥へ、そしてまたその奥へ。僕を侵す鈍い痛みが、窮屈な違和感から痺れる熱にスライドしていく。

もう何度目か、亀頭にえぐられた腰の底に、のけぞるほどの快感が滲んだ。

「…んッ…お、おッ…！」

「…ああッ…」

背後の彼が、ひっそり笑う。

ここだろう、知っている、と腰を回して貫かれれば、僕のペニス跳ね上がり、切れ切れの先走りが飛び散った。

「ああッ、ああッ、ああッ、そこっ…おッ」

僕を打つ腰が早まり、ぶつかる尻がびたびたと音を立てる。抓られる乳首の痛みすら、腹の底に熱を灯す。

嵐のような快感に落ちてしまう腰は、否が応でも彼を深く啜え込む。僕の中を、浅く、深く、真奥まで。交

わるほどに強まる快感と、大きく、強いストロークで上下するペニスのカタチしか見えない。もう、おかしくなる。

彼の腕の中で、激しい絶頂に崩れ落ちる。

「きもちよかった?」

囁く彼に、頷きを返すこともできない。

彼は僕の頭を抱いて、僕の涙を吸り取った。

殺風景なセミダブルの小部屋。

2人の大人の男が体を投げ出すには不十分なサイズのベッドで、デイヴィッドと僕は、抱き合っていた。

まるで恋人同士のように口づけを重ねて、その唇を首や胸に滑らせて、吸った肌に歯を立てて、明日の迷惑も顧みない愛撫を繰り返している。

香水の消えた肌は、乾いた男の体臭がする。ツンと鼻につくオスと、少しだけ甘く、柔らかく懐かしいよう

な匂い。そして体が僅かに離れると、僕らの下腹部から性的な臭いがした。

「欲しいって言って」

「ほ、ほしい…」

「僕の名前を呼んで」

「で、いういっど…」

「…何?」

「…きみが、ほしい…」

一度彼を受け入れたカラダは、二度目となればあつさり彼を飲み込んだ。

バスルームでのことが嘘みたいのに、彼はただ、僕に覆いかぶさって、腰を前後し続けている。静かな、けど激しい、めくるめく快感に埋め込まれていく。

「愛してるって言って」

「ア、あいし、てる…あ、アアッ…」

戯れにはふさわしくない言葉を求める彼は、悲しいほど真剣に、切実に、僕の目を覗いていた。僕の体の隅々を這う指は、愛撫の痕を残しながら、僕ではない者を

探していた。確かめるように、さすがのように打つ腰は、彼を遣して逝つた者への怒りをぶつけているようだった。彼が奥に達するたびに、弟の名前が僕の中に響く気がした。

「も、やめつ…イけ、ないつ、あ、アア——」

「いける…」

伸ばした手を、彼は、恋人達がするように、指を絡めて握り返した。

「いや、ア、オッ」

涙で霞む視界で、ほんの瞬間、彼が大きな目を見開いた。

「ッ、あ、あ、あッ…!!!!」

落胆に曇る瞳に見つめられながら、全てが砕け散つてしまうようなエクスタシーに飲まれた。

デイヴィッドは、最後まで一度もイかなかった。

僕の胸にしがみついて、彼は泣いていた。

息を潜めて、嗚咽を殺す彼の背中を、僕はただ、さすっ

ていた。

「ごめん」

震える謝罪に、「いいんだ」以外に返す言葉がわからなかった。

「ごめん」

僕は黙って、彼を強く抱いた。

初めて僕らは、互いを慰めるように、強く強く抱き締めあつて眠りに落ちた。

* * *

目を覚ますと、デイヴィッドはまだ眠っていた。

時計を見れば、のんびりしていられなかった。シャワーを浴びる余裕もなく、慌てて身支度を整える。寝癖どころではない髪を、アメニティのワックスで適当に撫でつけただけで、ジャケットを羽織った。

ドアに向かう背を呼ばれた気がして、足が止まる。

気のせいだとわかっていても、ベッドに引き返した。

デイヴィッドは変わらず、子供みたいに体を丸めて寝ていた。

疲れが滲む横顔も好きだと思いながら、目をそらした。その眉間の深い皺が消えるのは、彼がロンドンに戻ってから。僕ではなく、時間が解決するしかない。

せめて、その額やまぶたや、鼻の頭に口づけたい。けれど、忘れがたくなる。

さようなら。別れを告げるつもりで髪に少しだけ触れて、振り返らずに部屋を出た。

その日、職場に行くと、皆に口々に労われた。

「昨日の今日だ、少しゆつくりすればいい」と氣遣ってくれる同僚に、「こうしてるほうが氣が紛れるから」と笑顔で返した。

トイレで髭を剃ろうと鏡を覗いた時、首筋のキスマークに氣づいてぎよつとした。瞬時に脳裏によぎるその時の昂奮や快楽を、頭を振って追い払う。それでも耳にこびりつく声を、顔を洗って振り切った。

顔を上げれば、鏡には、酷く疲れきった僕がいた。寝不足でクマが色濃く、重ねすぎた唇は赤く腫れている。もう一度、見える範囲に2つ、赤く刻まれたそれを直視した。互いに与え合った愛撫の痕に、今頃、彼は何を思っているのだろう。それこそ昨日の今日のこと。彼を想わずにはいられないが、もう、過去のことだ。デイヴィッドを頭から締め出せば、後は、しばらく彼女に会うわけにいかないと思うだけで、他に何もなかった。

その夜。脱衣所で服を脱いだ僕は、また、彼の痕を目の当たりにして息を飲んだ。

体中、至る所に刻まれたそれから、しばらく逃げることはできない。

鏡の中、首の痣から、左肩の爪の痕へ、左胸に残る齒型へ、指で辿ってみる。

目を閉じれば、背後で彼の乱れた吐息が聞こえ、乳首を揉めば、彼の器用な指の感触が蘇った。

「…っ」

体の奥に熱が生まれて、思わず床にしゃがみこんだ。これ以上、鏡の中のふしだらな自分を見たくなかった。彼の香りや、僕の中を上下するペニスの快楽を思い出しながら、自分の体を抱いた。

アヌスの慰め方がわからなかったから、夢中でペニスをしごき続けた。どれだけ力を込めても、彼の愛撫には遠く及ばず、虚しさを忘れたくてペニスを擦った。忘れられないのではなく、忘れたくないんだ。

そう思い知れば、ますます彼への想いは募り、彼にされたようにペニスもろそを弄んだ。

それでも、もう出るものはなかった。

「…会いたい」

紛れもない本心が口をついて、やり場のない苦しみに呻いた。

「会いたい」

眩きながら、シャワーで汚れた体を洗い流した。

まるで、悪い夢の中を生きているようだった。弟の死と、馬鹿げた恋。

確かなものは、彼への強烈な慕情と、昨夜の鮮明な記憶だけ。

あの夜から、僕の日常は、ますます現実味がなくなっていた。

* * *

ふわふわとしたまま日々をやり過ごして、1週間がたった。

体に残る情事の痕は、日に日に褪せる。

ついには痣が消え、彼の犬歯の柔らかな傷が薄く残るだけになっても、それをなぞって自慰をすることをやめられなかった。

そして次の土曜日。

昼に起き、所用をこなした夕方、来客を告げるブザーが鳴った。

ドアの向こうには、デイヴィッドが立っていた。

「…あ」

思ってもみない驚きと喜びで、咄嗟に声が出なかった。

「やあ」

彼は僕を見ると困ったような笑みを浮かべ、気まずそうに視線を落とした。

「どうして、ここが——」

「あのパブの人が、教えてくれた」

「…どうして、来たの？」

「もう少しゆつくりこの町を見たくて…墓地にも行ってきた」

「そっか…」

「…少しでもいい、その…あなたの顔を見たくて」

もう終わったこと。わかっていても、僕をまっすぐ見つめる彼を拒む理由はなかった。

「…コーヒーでも、飲んでく？」

僕は、彼をフラットに招き入れた。

お茶の用意をしかけた僕に、デイヴィッドは後ろ手に持っていた紙袋を差し出した。

「お茶ならあるんだ」

カフェのショッパーには、二人分のコーヒーとスイーツが入っていた。

「嬉しいな」

ミルクと皿類を用意して、彼をリビングのソファに案内した。

コーヒーをマグに移し、ミルクを入れてラテにした僕を、対面の彼は目を細めて見ていた。

「あなたが好きだといいいけど…」

そう言っただけは、チョコチップの乗ったバナナマフィンに僕に勧めた。

もしかしたら、これは、弟が好んでいたんだろう。

気づかないフリをして「ありがとう」と笑い、「でもそっちのほうが好きだな」と、シンプルなお菓子をもらっ

た。

しばらくデイヴィッドは、黙り込んでいた。

「何かテレビでも見る？」と聞いても、「いいよ」と笑うだけで、うつむいてコーヒーを飲んでいる。

そして僕は、積極的に話せることがなく、ドーナツを食べながら当たり障りのない話題を探していた。

ドーナツを食べ終わると、彼は「僕は甘いものはそう得意じゃないから、よかったら」とマフィンの皿を僕に押し出した。

「2つも買ってこなければよかったのに」

「マフィンがハズレだったから、いいんだ」

苦笑した彼は、一息つくと、思い切ったように口を開いた。

「…僕は、あなたに甘えてた」

「……………」

心臓が跳ね上がって、デイヴィッドから目をそらした。彼のことを毎日のように想いながら、いざ目の前にすれば、あの夜に向き合う心の準備はできていなかった。

「…ごめん——」

「いいんだ、もう…謝罪はもらった」

「こないだは——」

「僕こそごめん、先に帰って、仕事があつたし——」

「こないだは、付き合わせて、ごめん…」

「いいんだ…」

「……………」

「済んだ、ことだよ…」

同意してもらえれば、虚しい恋に諦めがつけられる。

そう思った。

「帰るよ」

そう言つて腰を上げた彼は、寂しく笑つた。

玄関のドアに手をかける手前で、彼は振り返つた。

神妙な、何か言いたげな唇を見つめながら、僕は笑顔を繕つた。

「ロンドンにはいつ？」

「明日、今夜は宿を取つて…前と同じ」

「そか」

腕時計を覗くと、19時になろうとしていた。

「…飲みにも行く？付き合える」

「いいよ、ここんとこ飲みすぎてるから、今日くらい控える」

「そつか——」

「それに、一人でいたほうがいいと思うから…」

「…そうは、思えないけど…」

また、甘えてくれてもいい。なんて、言えなかった。

まだ、僕の気持ちを伝えるのは不謹慎な気がして、何より、彼が求めているものは僕ではないことをよくわかっていたから、言えるはずがなかった。

「デイヴィッド、君と会えて、よかった…」

「…」

「君が、とてもとても、ハリーを愛してたって、わかってよかった…」

「…」

「それと今なら…ハリーがどれだけ君を愛していたか、

よくわかるから…」

君は、まるでブラックホールみたいに「僕」を惹き寄せる。そして、ひとたび飲み込まれてしまえば、どんなに足掻いたって逃れられない。

「それがわかって、よかった…」

デイヴィッドは、大きな目を見開いて、僕を見ていた。

「…よくないかも、しれないけど…」

「っ…」

そして彼は、口にしかけた何かを言葉にする前に、僕に腕を伸ばした。

弾かれたように抱き合つて、唇を噛み合う僕らは、また、あの夜を繰り返してしまう。

* * *

「会いたかった」

荒げた息で囁いて、彼は僕の服を剥いでいく。僕の頬を手で包み、愛おしく細めた目は、幸せそうに笑って

いる。

「会いたかった」

あの日、諦めた口づけを、彼の額からまぶたに、そして鼻の頭に落とした。彼の服を剥いでいくと、あの香水が強く香った。彼の肌を剥き出すと、シャワーを浴びていない体は、あの夜より濃いオスの匂いがした。

「会いたかった」

寝室に辿り着く前に裸になつて、リビングのソファに縫れ込んだ。

「会いたかった」

彼の髪を指で梳いて、喘ぐ頭を強く抱きすくめた。吸い込まれるように、僕を求める彼を抱く喜びに、嘘はつけない。

「舐めて」

体を起こし、ペニスを差し出す彼の足元に跪ひざまずいた。

既に屹立した男根は、目の前にすればとても大きく、浮き出た血管はグロテスクで、自分のモノとは別物に

見える。あの夜から、何度も僕を狂わせたコレが欲しい。伸ばした舌で裏筋を舐め上げると、彼は口の端を上げた。

汗と鼻につく匂いは、彼のモノと思えば淫らな欲望を呼び起こした。舌で迎えながら唇を被せれば、彼は溜息をつき、僕の頭を強く撫でた。

深く吸い、舌でくすぐりながら口から抜いて、唾液を絡めて咥え込む。すると溢れた先走りは、しょっぱい。彼の目を見ながら飲み込むと、彼は幸せそうに笑つて、僕を呼んだ。

今夜の彼は、まるで人が変わったようだった。

僕を探る指は強引で、口づける唇は荒く、舐なる舌は激しい。開いた脚を押さえ込まれ、舐めて濡らした指がアヌスを割った。

「あ…」

先走りが垂れた僕のペニスを、彼は舌先で突いて焦らす。

「欲しい…?」

内腿うちももの肉を吸いながら、彼は意地悪く笑った。

頷くと、2本に増えた指でアヌスをこじ開けられる。

「んッ、ア…」

ねじ込まれた指の先が、待ち望んでいた快感をくれる。

交互に揺らす指が拡げるそこから、くちくちと卑猥な音が漏れている。

もつと、もつと。腰を浮かせば、彼は嬉しそうに笑い、指を搔く力を強めた。

「ンおおッ」

「僕が欲しい…?」

「ほしいッ…」

手を伸ばすと、彼は僕の親指から小指へ、ひとつひとつに歯を立てて、いやらしくしゃぶった。

劣情を剥き出した彼は、拘束具のように僕を抑え込み、獣のように腰を振った。

それでも熱く滾滾つてしまうカラダは、恥ずかしいほど、

彼に求められる悦びに飢えていた。

四つん這いで突き出した尻を打たれ、支配される錯覚に喘いだ。腰から背へ、そして肩へと、犯すような愛撫に染められていく。顎を掴まれて顔を向け、舌を伸ばしてキスをする。角度が変わり、突き下ろされる男根に僕のペニスが限界を迎える。

「い、ぐっ…」

右足を抱え上げられていきそびれた僕に、彼は容赦なく腰を打つ。

初めて交わる角度の快感に囚われた僕は、はしたなく腰を振り、彼にイイ所を擦りつけた。

「自分でシコって」

深く、浅く、腰を回しながら、弄ばれる衝動を慰めたくて、ペニスを指をかける。

「きみも、さわってっ…」

「どうやって?」

「つよくっ、しごいて…」

ねだった唇を、薄く笑う唇にねじ伏せられる。

彼は強くサオを握り、望み通りにしごいてくれる。自分のモノを弄るより、彼の手を感じたい。彼の指を探りあて、絡めた指で、先走りに濡れるペニスを擦った。腰を早め、ペニスの裏を握^にね始めた彼は、まるで僕の何もかもをお見通しだった。

「ッ、ぐうっ…………っ！」

恍惚に打ち震える舌を、息が止まるほど貪られる。ガクガクと跳ね上がる腰の中で、僕は、愛しい彼を強く強く締め上げた。

体位を変えて、交わる角度と深さを変えて、幾度となくカラダを繋ぎ続けていた。

今日まで知らなかった彼を知りながら、我を忘れて愛撫の痕を与え合った。

強く抱き締め合って、殴るように腰をぶつけ合い、小刻みに擦り付けるだけで、天に昇るほどハイになった。噛み合わないはずの凹凸が溶け合い、ぐずぐずと吸いつく粘膜が、このまま剥がれなければならないと思った。

「…言って、欲しい」

頭を抱いて、首を抱いて、頬に触れて、背筋をなぞりながら。

「あいしてる」

何度も、目を見て、本心を囁き続けた。

そして今日も、どれだけ僕が絶頂に達しても、彼が達することはなかった。

僕のベッドで、あの夜のように、デイヴィッドの頭を胸に抱いていた。

彼は泣いていなかったが、ただ黙って、僕の胸に頬をなすっていた。

「…何も、考えなくていい」

あの夜、彼が僕に囁いた言葉を咬いていた。

小さく頷いた彼は、また、僕の胸に頬をなすった。

デイヴィッドが眠りに落ちるまで、僕は、彼の髪を撫で続けていた。

* * *

目を覚ますと、昼前だった。

不自然な左腕の重みを見ると、デイヴィッドが僕の腕を枕に寝ていた。

彼がまだいてくれたことが、嬉しかった。

デイヴィッドが起きたのは、昼過ぎだった。

「寝過ぎた」と顔をしかめる彼に、ブレックファストを用意して、一緒にテーブルを囲んだ。

昨夜から何も食べていない僕らはすっかり空腹で、彼も僕も、トーストを追加し、目玉焼きを4つ平らげ、コーヒーのおかわりをした。

「食べ過ぎた」と僕のキャッシュを探る彼に、「いらない」とやめさせた。

「ありがとう」と笑う彼も、僕も、まっすぐ目を見る事ができた。

それでも、彼の口元には何かを言いたげな翳りが見え

て、僕は、目をそらした。

3時になる頃。シャワーと身支度を済ませたデイヴィッドは、玄関に向かった。

ドアに手をかける手前。昨日のように振り返ったその顔は、こちらが辛くなるほど苦しかった。

「…もう、来ないよ」

抑揚のない声が、胸に突き刺さった。

「…僕は、あなたに酷いことをしてる…」

「…」

「どうしても、あなたに…ハリーを重ねてしまうんだ…やめられない」

「…」

「こんな酷いこと、もう、したくない、申し訳ない…」

「…」

「本当に、本当にごめん…」

苦しく顔を歪めながら、言葉を絞り出すデイヴィッドを見ていた。

「僕が…僕がハリーじゃないなんて、わかりきってるだろっ…」

気がつくとも、僕は、泣いていた。

僕の涙に、彼は、はっと息を飲んだ。

「君が本当に酷いのは、僕にハリーを重ねてるからじゃない…」

「…」

「君は僕にハリーを重ねて、失望して、自己憐憫に浸る惨めな自分に勝手に苦しんでるんだろ…」

涙でぼやけた視界でも、彼が青ざめるのがわかった。

「…僕は、僕として、君が好きだ」

「っ…」

「君とハリーがどれだけ愛し合ってたかとか、世界で一番幸せだったかもしれないけども、そんなの僕には関係ないっ…どうだっていいんだ」

「…」

「君はそんな僕に気づきも、見ようもしない…」

「…」

「僕の気持ちなんかお構いなく、君は僕を使って勝手に苦しんでる」

「…」

「…それが、どれだけ僕を傷つけるかつ…君はっ、少しでも、考えた…？」

「っ…」

震え始めた僕の声音に、彼の顔が強張っていくのが見えていた。

「……『傷ついてる』なんて、言いたくなかったっ…」

「…」

「…君にほんの少しでも『見て』ほしいなんて思ってる僕は、惨めだっ…」

涙が溢れて止まらないのは、たった今、ようやく、弟がこの世にいない事実と、その弟を愛した男は、どれだけ手を伸ばしても届かないという現実を受け入れたからだった。

「…本当に、本当に、ごめん」

顔を伏せたまま、こちらに背を向けたデイヴィッドは、

静かにドアの向こうに消えた。

こうして僕は、長い長い悪夢から唐突に目覚めた。

* * *

僕は、酷い失恋をした。この先、二度と巡り合うことはないだろう、彼を知るほどに燃え上がる激しい恋だった。

あんなもの、恋にも満たず、失恋にもなりえない。ぽっかり空いた穴を埋め合っただけの、ただそれだけのこと、と思えたら、どれほど楽になれるだろう。

だけど、確かに、恋をしていた。

デイヴィッドが去った後、僕は、悪い夢を整理し続けていた。したところで何がどうなるわけでもなく、気が緩めばまた、涙が溢れた。

僕は、彼女に電話で別れを告げた。直接会って、頭を

下げる気力はなかった。いつか心の整理がいたら、ちゃんと説明をする。そう言って、通話を切った。そして、墓地に出向き、ハリーの墓前で謝った。

本当に空っぽになった僕は、この週、弟が死んでから初めて、休暇を取った。

* * *

まるまる休暇にしたこの週、僕は、ほとんど寝ているだけの怠惰な日々を過ごした。

そして次の土曜日。

昼前だというのに、来客を告げるブザーに叩き起こされた。舌打ちをして起き上がり、玄関に行った。

ドアを開けると、そこには、デイヴィッドがいた。悪い夢は、終わらないのか。

一気に目が覚めた僕は、反射的にドアを閉めたが、彼

に押さえられて叶わなかった。

無精髭が伸び、寝起きで髪もぼさぼさの酷い有様の僕は、恥ずかしくて顔を向けられない。

「話をしたいんだ…しなくてもいい、聞いてくれるだけでいい…」

ドアの隙間から聞こえる声は、切実だった。

「本当は、ずっと…ずっと、あなたのことばかり考えてた」

「…」

「マイケル、あなたのことだ」

「…」

「まだまだ、ハリーを忘れたわけでも、悲しみが癒えたわけでもない、当然だ…」

「…」

「けど、葬儀の夜から、毎日、少しずつ少しずつ、あなたのことを考える時間が増えてった…」

彼の言うことがうまく飲み込めなくて、頭の中で反芻していた。

「今日、マイケルは朝起きてまず何をしたのか、どんなブ렉ファストを食べたのか、なんのテレビを見たのか、もしかしたらYouTubeかなとか、職場でどんなことがあったのか、誰と何を話したのか、フットボールを観に行くのか、パブに行く時に雨に降られなかったかとか…ずっと、気づけば、あなたのことばかり考えてた…」

「…」

「僕の知らないあなたのことを、知リたかった」

「…」

「けど、連絡先を聞いてなかったから…」

「………」

ドアをちゃんと開けると、彼の切羽詰まった顔が少しだけ緩んだ。

「…僕は今週、休暇を取って、ずっと家でゴロゴロしてたよ」

「…」

「少し疲れたから、たまにはいいか、って…」

「…」

「まだ休暇中だから、そつとしておいてほしい——」

「その、つまり」

僕の言葉を遮ると、デイヴィッドは後ろ手に隠していたバラの花束を差し出した。

「マイケル、僕と、正式に、付き合つてほしい」

そんなにも真剣に。あんなファックをしながら、今更堅苦しいかと、吹き出してしまふところだった。

「花なんて…墓前に手向けてきなよ——」

「さつき行つて、花も置いたよ」

「そう…」

真つ赤なバラが12本。本気のプロポーズで贈るやつだ。こういうの、きつと、ハリーなら喜ぶんだろう。

…けれど、もう、弟は関係ない。

花束を受け取ると、涙がこぼれそうになったから、なんとかこらえた。

まだ夢を見ているのかもしれない。胸がドキドキしていた。

「ランチでも、どうかな…?」

声を出せば、泣いてしまうのがわかつていた。

頷くだけの僕に、デイヴィッドは、ようやく笑顔を見せた。

* * *

身支度を済ませると、もうお茶の時間になろうとしていた。

デイヴィッドと僕は、繁華街へと肩を並べて歩いた。初めて一緒に歩いたあの夜より、少しだけ距離が近かった。

僕らが初めて言葉を交わしたパブで、遅いランチをした。あの日はカウンターだったが、今日はテーブル席にした。

彼は、「もつとおしゃれな所だつていいのに」と少し不満げだった。

「僕はまだ、半信半疑だよ」

そう答えると、彼は「そか」と眉を上げ、「仕方ないな」とギネスに口をつけた。

「ロンドンには？」

「明日帰る」

「あのホテル？」

「そう」

「君って、マメだね」

「？」

「わざわざ出向いてさ」

「たった2時間半だ、寝てれば着く」

「往復したら5時間だ——」

「あなたのためなら来るよ」

ローストビーフを平らげたデイヴィッドは、「当たり前じゃん」みたいな顔で笑った。

けろりとした顔は、憎たらしいほど愛らしくて、やっぱり、彼が好きだと思う。

パブを出た僕らは、メインストリートを北へブラブラ

歩いた。

デイヴィッドと僕の距離は、先程より少しだけ縮まっていた。

特にどこに行くとも決めずに、この町で一番大きな公園に行った。

ハリーの訃報が届いてから、約1ヶ月半が経とうとしている。園内のあちこちでは、春の訪れを告げる花々が咲いていた。

「春だ」

「鳥、めちやめちや鳴いてる」

「恋の季節だからね」

「僕達と同じだ」

「それはたまたま」

「サクラ、きれいだ」

「すぐに散っちゃうから、見れてよかった」

「あなたは引きこもってたんでしょ、いいタイミングだった」

「誰のおかげだよ」

「ロンドンじゃ先週満開だった」

「人の話聞いてる？」

僕らは、見たままや思ったことを口にしながら、散歩をした。

午前の雨に濡れた芝生はみずみずしく、青い土の匂いがしていた。

ベンチの水滴を拭って、少し休憩をした。

デイヴィッドと僕の隙間は、また、少しだけ縮んでいた。

「こういう話は、しないほうがいいのかもしれないけど——」

「ハリーののこと？」

「…そう」

彼は、複雑そうに下唇を噛んでいた。

「そういう扱いをされるほうが、弟は嫌がると思うよ」

「そか…」

「…」

「…ハリーは、僕達のことを知ったら、怒るかな」

「…そうだな、めちやくちや怒るだろうな」

「…」

「でも、僕が彼なら…最終的に、君が幸せならそれでいい、と思うと思う」

「……………」

「…それに、彼が僕なら、同じことをしてた…きつとね」

「…」

「彼なら、もっと早く、うまいこと君となるようになってただろうけど…」

「そうかな」

苦笑した彼は、細めた目で僕を覗いた。

「…こんなところでキスなんてしない」

「そう」

「お茶でもしに行こう」

僕らは、来た道を引き返して町へ向かった。

腕が触れそうな近さで、デイヴィッドと僕は、肩を並べて歩いていった。

「手、繋ぐ？」

さり気なく強引なところは、彼の長所だろう。

「…まだ、なんだか、恥ずかしいから…」

「そか」

「君、距離詰めるの早いな」

「そうかな」

不思議そうに目を丸めてる彼も、好きだと思った。

「ジェラートを食べに行きたい」

最近、この町に新規出店したカフェの名を出すと、彼

の反応は「ああ」と薄かった。

「ロンドンでたまに行く」

「僕は知らない」

「おすめのトッピングを教えてあげる」

「たぶんそれは、僕好みじゃない」

「ねえ」

「？」

「…今夜、あなたの家、泊まっていい？」

「……いいよ」

「嬉しい」

デイヴィッドは、どきどきに紛れて僕の手を握った。
そしてそのまま、僕らは、カフェへの道をゆつくり歩
いた。

(おわり)

かいせつ

「Scratch (with 稲葉浩志)」／TK from 凜として時雨のイントロのピアノを聴いたら降りてきたお話という、謎のひらめき発動系？の一作です。

なのでタイトルはそのまま「scratch」にしたのですが、お話の内容と全然関係ないので気にしないでください！

シンプルに、理屈じゃないドドドとんでもない一目惚れをしたら体の相性も最高〜みたいな、ある部分理想的なふたりの恋模様を書くのが楽しかったものです。読み返すとスケベが結構えつちで気合はいつてたのがわかります。

が、弟の死が起点にあるので、罪悪感に苦しみつつも堕ちていき…最後はこれでもいいのだと自分に言い聞かせて前を向くしかない、そんな、大人の恋となっております（?）。

アップしてみたら、この二人、この先大丈夫なの？と心配をいただいってしまった一作で、大丈夫だよ〜とい

うのはガイドpdfで書いたのですが、ここでも念の為の説明をしておきます。

結論から言うとお大丈夫です！この後、1年もしたらdさんカーディフに越してきて結婚します！それまでは、毎週末dさんが泊まりに来ます。初めのうちはmさんがまだ葛藤してたり、すれ違いがあつたり、dさんがうっかり元彼に対する感覚でズレた接し方をしてちよいちよい喧嘩に発展しますが、仲直り日すれば大丈夫、翌日には「離れたくない」とか言ってる。

最終的に、蓋を開ければ、弟よりもmさんのほうが性格的に結婚向きだったのです、ハッピーご都合設定♡相手の顔が大好き、体の相性も最高、お互い以外の誰かなんてもう考えられない。

で好き放題いろいろなふたりを書いていますが、このカップルは始まりこそ難局でしたが、それさえ乗り越えてしまえば、ごく平凡で一般的な、ゆえに幸せ過ぎるふたりなのです。

(2022年3月2日 pixiv に公開)

Hummingbird

「僕には前世の記憶がある」と言うと、大抵の人は面白がり、話を聞きたがった。

「僕には100の前世の記憶がある」と言うと、多くは苦笑いで「冗談だろう」と返した。

そして僕は、その「事実」を誰にも言わなくなった。

厳密には、必要に応じてかかりつけの精神科医に話すこともある。

けれど、記憶の概要をざっくり話したのは、せいぜい初診とその後の2〜3回程度。「非常に稀なケースだね」と眉をひそめたドクター曰く、僕は「妄想障害」らしい。もう長いこと通っているが、カウンセリングでは心身の好不調の報告をするだけ。

今日もいくつかの薬を処方されたが、いつものように、たまに役に立つ抗不安薬と睡眠薬を残して他は捨てた。

正常なのは、自分が一番よくわかっている。

「頭のおかしいヤツほど、自分が正常だと言う」

誰もがそう考える。

だから僕は、ひとりでいることを選んだ。

* * *

その人が初めて僕の店に現れたのは、サクラの花が散り、バラの蕾が今にも花開こうとしている春の午後のことだった。

僕は、ロンドンの北、セント・ジョンズ・ウッドで小さなカフェを営んでいる。地下鉄駅を挟んでアビー・ロードと反対のエリア。メインストリートを一歩入った閑静な住宅街の5軒目にある僕の店に、地元の常連を除けば新規の客が来ることは稀だった。

気後れしたようにドアを開けたその人は、店内を見回し、カウンターの僕と目が合うと、少し驚いたような不思議そうな顔をした。そして何度か瞬きをして、懐かしむような笑みを浮かべて僕を見つめた。

「…いらっしやいませ、お好きな席へどうぞ」

咄嗟に口につきかけた「あなたに逢いたくなかった」を笑顔に隠して、僕は「彼」を招き入れた。

この日は土曜日。二人掛けのティーテーブルが7つの狭い店内には、先客が3人いた。

窓際の席に掛けたその人は、「とりあえず」とブレンドを頼んだ。

深い焦げ茶の髪と、緋色が混じる明るいブラウンの瞳のコントラストが綺麗だった。

コーヒークップを彼のテーブルにサーブすると、彼は僕を見上げて小さく笑った。

利発そうな大きな目と、愛嬌が浮かぶほころんだ口元は、とても優しいそうだった。

胸を突き破りそうな「あなたに逢いたかった」を会釈に変えて、僕はカウンターに戻った。

その人は、2時間ほど店にいた。

彼はペーパーバックを開き、時折スマホを覗いていた

が、気づけばその視線は店内や僕を忙しなく往復していた。興味深そうに瞬く目元は少年のようで、好奇心を抑えきれないように見えた。

彼はコーヒーのおかわりを2杯頼み、3杯目のカップをサーブした僕に、気まずそうに「長居をしてすみません」と謝った。

「お構いなく、好きだけゆっくりしてください」と答えた僕に、彼は初めて「ありがとう」と碎けた笑顔を見せた。

思わず涙ぐんでしまったのに気づかれないように、慌てて彼に背を向けてカウンターに戻った。

「また…来てもいいでしょうか」

会計を済ませた彼は、なにかバツが悪そうに視線を反らし、わざとらしく腕時計を見ていた。

目の前に立たれると、少し見上げるほど上背がある。そのよく知った感覚に気づかないフリをして、僕は「もちろん」と笑った。

彼はほつとしたように表情を緩めると、「ごちそうさま」とレジスター脇のグラスにチップの1ポンド硬貨を入れた。

ドアを出ていく背中を見送った後で、僕は、避けられない「未来」を思つて少し泣いた。

そして、彼のチップの硬貨を拾い、別の箱に移した。

* * *

その2日後の月曜日。

19時半を過ぎた頃、その人はやつてきた。

この日の彼は、春らしいクリーム色のジャケットに紺の差し色のボタンダウンシャツ、スラックスというオフィスカジュアルの出で立ちで、レザーのバッグを持っていた。一見して仕事帰りだとわかる装いは、先日のラフな格好から一転して大人びて見えた。

「いらつしやいませ」と迎えた僕に、彼は「こんばんは」とはにかんだ。

その声は、まるで「ただいま」と言っているように聞こえた。

先日同様、彼はブレンドを頼み、2杯おかわりをした。そしてペーパーバックは読まず、スマホの代わりにタブレットPCで何かの作業をし、その合間に僕や店内を眺めていた。

3杯目をサーブしながら「お仕事、忙しいんですか？」と聞くと、彼は「繁忙期で」と苦笑した。

僕は、その小さなかわいらしい嘘を、「どうぞごゆっくり」と笑顔で許した。

閉店は21時半。

会計を済ませた彼は、「長居してすみません」と苦笑した。

「：職場は、この辺りなんですか？」

「ええ：ああ、グリーン・パークのあたりです」

僕の問いに目を丸めた彼は、慌てて懷から名刺を取り出した。

そこに書かれた名は知らなかったが、「彼」同様、愛おしく思った。

「…インテリアデザイナー？素敵なお仕事ですね」

「雇われですよ」と謙遜した彼は、僕の差し出した名刺をそつと受け取った。

「…デイヴィッドさん、言いたいことはわかりますが、内装は変える気がないので営業をかけられても困ります」

初めて呼んだ彼の名は驚くほど口に馴染んだが、驚くことでもなかった。

「そんなつもりはありません」

僕の名刺をじつと見つめていた彼は、苦笑して名刺を懐にしまった。

「とても…興味深いですよ、それに、不思議と落ち着きます」

「そう言っていただけで、嬉しいです」

「Nightbird Cafe」の名前通り、遅くまでやってくれていて助かります」

そう微笑む彼は、懐かしそうにどこか遠くを見ていた。「…お住まいはこの辺りですか？」

「いいえ、サザークです」

「…」

彼の職場からここまで、地下鉄で北に7駅、自宅までは職場から南に3駅。逆方向でも、「彼」と「僕」を隔てる距離を思えば、些細なものでしかない。

「じゃあ…マイケルさん、おやすみなさい」

彼はニコリと笑うと、チップの1ポンド硬貨を置いて店を出ていった。

そして僕は、その硬貨を先日 の箱にしまった。

* * *

その日から彼は、毎日僕のカフェに訪れるようになった。彼が来るのは19時から遅くても20時、常連客が帰る頃合いで、僕はほぼ毎日、店じまいまでの静かな時間を彼と過ごすことになった。

彼は決まってブレンドを頼んだが、その週の水曜日、僕は黙ってキリマンジャロのアメリカンを出した。

彼は何も言わなかったが、マグに口をつけると「美味しい、好きです」と微笑んだ。

「口当たりが軽いから、飲みやすいですよ」

長居を気にしておかわりをする彼を慮り、おかわりはしなくていいというつもりで大きなマグカップで出したが、彼は結局おかわりをした。

その週の金曜日。

夕方から静かな雨が降り続いていった。

20時を過ぎた頃に現れた彼は、目につく程度に濡れていた。

僕はタオルを差し出し、いつもの窓際に掛けた彼にキリマンジャロを出した。

21時を過ぎた頃、おかわりのマグをサーブした僕に、彼は「少し、いいですか」と小さく尋ねた。

客は、彼しかない。僕は「いいですよ」と答えて、

自分のマグとビスケットを用意して、彼の隣のテーブルに掛けた。

「ビスケット、よかつたら食べてください」

「ありがとう、ちょうど小腹が空いていました」とはにかんだ彼は、頬張った菓子を飲み込んで一息つくとき、口を開いた。

「あの、絵……」

彼がまっすぐ見つめる対面の壁には、ある絵が掛けてあった。

「とても好きです、どこだろう……」

「あれは、『Nighbird』です……僕が描いた、下手ですが……」

「Nighbird へ」

月が映る小さな泉の風景画を見つめる横顔は、不思議そうだった。

「とうの昔になくなりましたが、恐らく今は、ありません……僕の中にあるとしか……」

「あなたの、中……?」

「…このカフェは、『僕』が作っているんです」

「…詳しく、聞いても？」

こちらをじっと見つめる彼が、横目に見えていた。

彼を見ずに、僕は続けた。

「デイヴィッドさん…」

「…？」

「僕には、前世の記憶があります」

彼は、僕の言葉に驚くわけでも、笑うのでもなく、静

かに僕を見つめていた。

「…僕には、100の記憶があるんです」

「…ぜひ、聞かせてください」

「…」

「差し支えなければ…」

そう言つて彼は、コーヒーに口をつけた。

「…全ては長くなるので、かいつまんで話しましょう」

そう言つて僕も、コーヒーに口をつけた。

「その記憶が初めて現れたのは、15歳の春でした…ま

だその時は、それが記憶だとわかりませんでした…」

「…」

「それは突然、頭の中で、映画やドラマのような鮮明

さで繰り広げられ、ぶつりと途切れた時には、僕は号

泣していました」

「…」

「その時のそれを夢、とします。その夢の中で、『僕』

はどことも知れない異国にいました。城壁の外は砂漠

に囲まれ、遠くには砂嵐が吹いていた。埃っぽい路地

にはマーケットが並び、人々は昼の暑気を避けて夕方

以降に活動を始める、そんな国です。石造りの町並み

や人々の装いに見覚えはなく、現代ではない、恐らく

とても古い時代なのがわかりました。」

「…」

「そして『僕』には、心から愛する人がいて…たびたび、

情熱的な愛を交わしていました」

「…」

「そしてある日、戦争が起きました、近隣の隆盛国に

攻め込まれたのです。『君を護るために戦う』、そう言つて戦場に向いた『彼』は、そこで命を落としました。どす黒く変色した血にまみれた『彼』の遺体を抱いて、『僕』は絶望しました。」

「……」

「そのあまりにリアルな夢は、まだ子供だった僕を恐怖のどん底に叩き落とすのに十分な生々しさでした。当時の僕は、夢で見た異国や、具体的な性行為や、無慈悲な暴力が引き起こす凄惨さもろくに知らなかった。それなのに、我が身のことに味わされる幸福と絶望、悲しみの衝撃は、想像を遥かに超えていました。理解の及ばない激しい感情に圧倒された僕は、それから数日寝込みました。」

「……言葉も、ない」

うなだれた彼は、額に手をあてた。

「……不幸にもそれは夢にも繰り返し現れ、そのたびに僕は泣いて飛び起きました……結局その一週間で5キロも体重が落ちたあの頃は、人生でも最悪の時だったと

思います。」

僕は苦笑して、コーヒード喉を潤した。

彼はただ息を潜めて、僕の話を待っていた。

「その後、僕はその恐ろしい夢を誰にも言えずにいました。両親に言おうと思つても、性的な要素を省きようがないことを思うとできなかった。要らぬ病気の疑いをかけられたかもしれません——」

「それで、誰にも？」

「ええ……ずっと、一人で抱えることしかできませんでした」

「……」

「それから半年程たった頃、依然その夢に苦しんでいた僕に、突然、2つ目の夢が訪れました。驚くべきことに、それは、1つ目の夢ととてもよく似ていた。それは、恐らくアジアのどこかという点や、僕らの身分や生業は違っていたけど、同じく古い時代で、そして『僕』と『彼』は、ここでも深く愛し合っていた。しかし、やがて戦争が僕らを引き裂き、『彼』は死に、『僕』

は絶望の淵に突き落とされました。」

「…」

「悪夢が増えても、どれも追ひ払うことができず苦しみ続けました。忘れたくても、まるでついさつき見てきたことみたいにハッキリと脳裏にこびりついているんです、今も変わらずに…。」

「…ジーザス」

低く唸った彼に、僕は小さく吹き出した。

「クリスチャンなのに、前世の話を信じるんですか？」

「……なんて言えはいいのかわかりませんが…あなた
は、嘘は言わない」

ドキリとした僕は、彼からそらした視線を時計に流した。

時間は、閉店が近かった。

「…もう、閉店です」

「…」

「楽しくない話をしてしまつて、すいません——」

「また明日、来ても…？」

「…明日は、天気がいいといいですね」

テーブルに会計分の紙幣とチップの1ポンドを置いて、彼は帰っていった。

僕は、止めようがないカウンタダウンの結末を思つて、少し泣いた。そして、彼のチップを箱にしまった。

* * *

翌日の土曜日。晴天とはいかずとも、雲間に覗く青空が気持ちのよい日だった。

彼は、連日のように19時を過ぎた頃に現れた。

彼以外の最後の客がいなくなつた20時過ぎ、僕は、自分のマグと二人分の軽食を用意して彼の隣に掛けた。

「ヒザ？」と目を丸めた彼に「遠慮なくどうぞ」と勧め、

「ビールもどうぞ、缶ですが」と差し出すと、彼は「さ
さやかなディナーだ」と笑つた。

しばらく僕は、黙つて小腹を満たした。

サイフォンのお湯ががこぼこ沸く音と、小さく絞つ

たジャズのBGMが、僕と彼の距離を縫い合わせるように埋めていた。

僕がビール缶のタブを開けると、彼も缶を開けた。

そしてそれを合図に、僕は口を開いた。

「…初めての夢が訪れてから3年の間に、僕は、10の夢を見ていました」

「…」

「10の夢からわかったことは、国や場所や時代や細部は異なっても、登場人物とストーリーは一貫して同じ。いづどこにいても、彼の名前や顔貌や髪や肌や目の色が違っても、いつの僕も僕であるように、いつの彼も彼その人で、僕らは深く愛し合い、最終的に戦争で彼は死に、僕は絶望するのです。」

「…」

「どうして同じストーリーばかり繰り返すのか、どうしてこの夢から逃れられないのか。この頃には逃げることを諦め、「なぜか」を考えるようになっていまし

た…考えてもわかるわけがないのに…でも、必死に。…そしていつの間にか、夢の具体性と規則性から『これは現実にあったことなのではないか』と思い始めるようになっていました。」

「…」

「そして5年のうちに夢は50に増え、学生時代は、悪夢に追われながら、悪夢を紐解くことに囚われていく僕がいました。同時に、この頃は新たな夢が現れる頻度が増し、心はそのたびに蝕まれていきました。夢の内容は一貫していても、あまりにも鮮やかに与えられる幸福と絶望はさまざまで、1が50になれば実際の苦しみは1が500に感じられるのです。」

「…せめて、誰かに頼れたら——」

「この頃から精神科に行くようになりましたが、それっぽい診断名がつくだけで、理解されない事実も、辛かった…」

「それっぽい？」

「…妄想障害、一般的には、それで片付けられてしま

います」

「…今も、通院を？」

「ええ、2〜3ヶ月に一度、雑談するだけ。…時々情緒が不安定になつてしまうので、そういう薬を処方してもらえ、そのために行くようなものです。」

うつむく彼の横顔を視界から追いやって、僕は壁の絵を眺めた。

「そしてある時期、輪廻転生という言葉を知った僕は、『これらの夢は全て、『僕の前世の記憶』なのだ』と確信しました。根拠はありません、でも…わかるんです。間違いなく『そう』なんだ、って。」

「誰か、友達とかには——」

「話しても、まともに受け止めてくれる人はいなかった…だから、誰に話すこともなくなりました」

「…」

「それからです、僕は、『僕』の記憶とうまく生きていくことに決めました」

「…うまく？」

「気づけば僕は、記憶の辛さに振り回されているうちに、まともに社会で生きられなくなっていました…どこかの企業に就職するとか、そういう人並みなことをする余裕なんてなかった…」

「…」

「けれど、記憶は辛い反面、それだけの幸福があります…幸せな部分だけ切り取って、それらのピースを集めたものが、ここです。お茶やお酒を飲みながら、『僕』と『彼』がただ語らうだけで幸せだった時間が、記憶の中にたくさんあります。」

「…」

「…あの、絵は？」

「ぼつりと尋ねた彼は、静かにビールに口をつけた。

「『僕』と『彼』が最も輝いて、とても幸せで…その分辛かった時のものです」

「…」

「おそらく紀元前100年頃、『僕』は砂漠の端の小国の王で、『彼』は才覚溢れる将校だった。『僕ら』は夜

になると、人目を忍んで名もないオアシスに出かけては愛し合う。そこには小さな泉があつて、泉に満月が映る眺めはとびきり、どんな宝石よりも美しかった。『僕らはそこを Nigubird と呼びました、夜にこっそり出歩く自分達に重ねて…ふざけ半分…ふたりだけの合言葉だった。』

彼が、重い溜息をつくのが聞こえた。

僕のビールは、気づけばもう空に近かった。カウンターに戻り、彼と僕のコーヒーを淹れて戻った。

マグを受け取った彼は、軽く頷いて僕の話促した。

「…結末は同じです。大国に攻め込まれて『彼』は死に、Nigubird も無残に踏みにじられてしまった。分厚い歴史書の1ページにも満たない短い歴史の、誰も聞いたことのないような小さな国のことです。」

「…」

「僕は、さまざまな記憶を理解して受け止めるために、歴史の本を読んだり、博物館や美術館に行きながら、『僕』に繋がる情報や物を集めるようになりました…」

できる範囲ですが」

「…」

「例えば、あそこにあるのは中国の清時代の香炉を模したもの、あれはタイの扇子、スウェーデンの木彫りのデカール、ネイティブアメリカンのナイフ、一次大戦の頃のトルコのランプ、スペインの燃えるような太陽と丘の写真…場所も、年代もバラバラな物ばかりですが、全部、『僕』なんです…」

「…」

「…だから、あなたがインテリアデザイナーって知って、少し恥ずかしかったんです、壁紙も床のタイルも、装飾品の雑貨も絵も何もかも、ちぐはぐだってわかっていますから……」

彼がおかわりのコーヒーにろくに口もつけず、険しいような顔で壁を見つめているのに気がついた僕は、何か急に恥ずかしくなった。

これまで僕は、『僕』の話を、ここまで詳細に誰かに話したことは、一度たりともなかった。

「随分、話しすぎてしまいました…」

腕時計を見ると、あと5分で閉店時間になろうとしていた。

「…もう、閉店です」

彼は静かに腰を上げると、多すぎるコーヒー代をテーブルに置いた。

「突飛な話ですから、信じてくれなくても——」

「僕は、あなたを信じます…」

僕を見下ろす彼は、まるで僕を慰めるように優しく笑っていて、僕は、胸が詰まった。

「明日は…」

「日曜は、休業です…」

「マイケルさん、ごちそうさまでした」

「…」

「おやすみなさい」

彼は、チップの1ポンド硬貨をテーブルに追加して帰っていた。

視界は涙でぼやけて、取り上げた硬貨がよく見えな

かった。

“僕”を唯一理解してくれる“彼”は、いずれ消えてしまう。

そう思うと、涙をこらえることができなかった。

* * *

翌日の日曜日。

昼に起き、いつものように買い出しに出かけ、店に戻った18時頃。僕のカフェの店先には、僕を待つ彼がいた。

「こんばんは」

彼は、大きな紙袋を両手に掲げてみせると、「ホールフーズに寄ってきました、一緒にディナーでもいいかがですか？」と照れくさそうに笑った。

そう、“彼”は、たとえどんな困難や障害が待ち受けていようとも、目標へまっしぐらに突き進む人だ。

「…コーヒーは、いらなそうですね」

僕は精一杯の笑顔を作って、彼を店内に招き入れた。

ベイクドポテト、マカロニ、ローストビーフサンド、チキンサンド、トルティーヤのラップサンド、ラザニア、たぐさんのスシ、コンキリエとツナのサラダ、ミートローフ、ブロッコリーと豆のサラダ。

彼がデリを並べていくと、すぐに2つのテーブルがパシクした。

「こんなに、食べきれませんよ」

思わず笑ってしまうと、彼は構わず「好きなものを好きなだけどうぞ」と笑い、残りのデリを、もう2つのテーブルに全て並べた。

コーニッシュパステイ、ベーグル、ピザ、パエリア、タンンドリーチキン、芽キャベツとベーコンのソテー、ジェノベーゼ、サーモンのグリル、エビの点心、ビーフン、オリーブ盛り、フルーツ盛り。

「これだけあれば、あなたもきつと満足するはず」

得意そうに眉を上げてみせる彼の無邪気さを、愛しく思った。

「サーモンが好きです」

「思ったより普通ですね…うつかりしてた、白ワインを買ってくるんです」

ひょうきんなくらい鼻筋に皺を寄せた彼も、愛しいと思った。

「チャイニーズも好きですよ」

「それはよかった、点心は5個なので、あなたに3つあげましょう」

朗らかに笑う彼はとても、とても素敵で、当たり前に縮まっていく距離が嬉しい反面、その早さが辛かった。そして僕らは昨夜と同じビールをグラスに開け、肩を並べてダイナーの席についた。

彼も僕も、食べたいものを好きなだけ、好きなようにつつきながら、思いつくままにぼつぼつと会話を繋げていた。

「僕は土日はだいたい昼まで寝ていて、ネットをしなから映画やドラマを観たりするだけのだらしない休日

を過ごしています」

「インテリアデザイナーなのにな？」

「デザイナーと名のつく者がみんな洒落た生活をしてるわけじゃありませんよ」

「少し、幻滅しました」

「残念」

「冗談です…このビーフン、とても美味しいです」

「…本当ですね…でも、ダラダラしてるだけでもなくて、時々、近所の犬の散歩に行ったりします」

「近所の？」

「そう、高齢のご夫婦の飼い犬です、ポインターなのでのびのび走らせてあげないと。手伝い半分、僕の運動も兼ねつつです。」

「それはいいですね」

「犬を飼いたいけど、平日は十分に時間を取ってあげられませんから」

「それ、僕も同じです」

「チーズ盛りも買ってくるんだっただな…」

「僕は日曜は買い出しに行きます、食品のマーケットをハシゴするのが楽しみで、だから、普段よりよっぽど早起きです」

「コーヒー豆だけじゃないんですか？」

「いろんな国の食材や調味料を見てるだけでも楽しいんですよ」

「ああ、納得がいきます」

「…」

「すいません、つい、あなたを知ったつもりになっていました」

「いいんです…構いません」

「…先週、初めてここに来たのは本当にたまたまでした、次のクライアントのテナントが近くにあつて、近隣の下見がてら…」

「恐る恐る、みたいな感じで店内を覗いた顔、よく覚えていますよ」

「運命、です」

「…そういうの、信じるんですか？」

「もちろん」

「…ところでこの店、あまりにも統一感がないので、BGMはせめてカフェらしくジャズにしています」

「自分で統一感がないって言うんですね」

「本当のことですから…」

テーブルを埋めるデリの3分の1がなくなった頃。

彼は3本目のビールを開け、缶のままぐいと一口飲んだ。

「…マイケルさん」

改まって少しトーンを落とした声に、僕は口に運びかけていたフォークを下ろした。

「…こうしているだけで、あなたのことが、ますます好きになります」

唐突な言葉に、どう答えればいいかわからなかった。予期できていたことなのに、胸は早鐘を打っている。

「…コーヒー、淹れますね…」

席を立ち、彼に背を向けると、腕を思わぬ力に掴まれた。

「…っ」

振り返ると、彼が僕の目の前に立っていた。

「マイケルさん、僕も、あなたに話すことがあります」

怖くてその目を見られず、強い意志が浮かぶ唇を見つめていた。

「…僕は、あなたに逢うために生まれた」

「…」

「それだけです」

「…」

「…あなたも、わかつてるはずだ」

「…っ」

「だから、僕に話してくれた」

左肩に伸びた彼の手を、反射的に振り払っていた。

「…僕はっ…」

こらえていた激しい何かが喉にこみあげ、視界がぼやけた。

「あなたに、逢いたく、なかったっ」

ついにこぼれ落ちてしまった涙にいたたまれず、顔を

伏せた。

「どうして――」

「あなたは、僕を残して逝ってしまうつ――!」

恐れていたことを口にする、涙が後から後からこぼれ落ちた。

「あなたを失ったら、きつと、もう、その苦しみに耐えられないつ――」

汗が吹き出し、視界にノイズが混じり始め、音が消える。苦しくて、息ができない。

「…ならば、いつそつ、逢いたく、なかつ――」

そこで、意識がブラックアウトした。

* * *

気がつくと、ベッドの中だった。

見回すと、自分の寝室だとわかった。

ベッドの端に掛けた彼が、僕を覗いていた。

薄明かりの影になっけていても、その顔が曇っているの

がよくわかった。

「…気分は？」

彼は優しく声を潜めて、僕のこめかみに指の背でそつと触れた。

「…あなたが、ここに？」

「気にしないで」

「――」

「…心配だから、朝までいるよ…ゆっくり休んで」

「…大丈夫」

「水、持つてくる」

水差しとグラスを持つて戻つた彼は、ベッドに掛け、そのまま僕に背を向けていた。

しばらく、彼も僕も、互いにかける言葉を探していた。

頭がぼんやりして、思考がままならない。

僕は、悲しくてたまらなくなつた。

「…ごめん、なさい」

言葉と一緒に、また、涙がこぼれた。

振り返つた彼は寂しく笑つて、また、僕のこめかみに

そつと触れた。

「…マイケル、僕の目を見て、ちゃんと…」

その声はとても優しくったが、僕を覗く瞳には毅然とした光があつた。

「マイケル、僕は、あなたの話を信じてる」

「…」

「…けど、あなたはひとつだけ、間違つてる」

「…」

「あなたは、前世の『あなた』に支配されてしまつてる…」

「…」

「あなたは過去に囚われすぎるあまり、とても大切なことを忘れてしまった」

「…」

「あなたの前世は、あなたじゃないし、前世の『僕』も、僕じゃない」

「………」

「あなたはもう、あなたの人生を僕と歩まなきゃいけない」

「ない」

「………」

「僕はどこにも行かない」

「…」

「僕は、あなたと生きるために生まれてきた」

「…」

「僕も、『わかつてる』んだ」

「…」

「あなたが前世を信じるように、僕は僕達の未来を信じてる」

柔らかに微笑んだ彼は、静かに体を起こした。

「…じゃあ、僕は、あつち、リビングで寝るから」

離れていく彼の腕へ、僕は、必死に手を伸ばしていた。指に力が入らず、袖を掴みそこねて落ちた手を、彼が掴んだ。

「…側に、いて、ほしい…」

「…」

「……デイヴィッド」

「…」

「…あなたを、信じた時から…」

薄明かりの中、彼は見逃してしまいそうなほど小さく頷いて、そして、僕の手を強く握り直した。

彼に抱かれて、夢うつつを彷徨っている。

僕を包む温もりはどこまでも優しく、委ねた体が吸い込まれていく幻に酔う。

時々、ふと涙がこぼれて、そのたびに彼は、僕を抱く腕に力を込めた。

彼の心地よさが、麻酔のように僕の痛みを麻痺させていく。

「…マイケル」

「…」

「…ふたりで新しく、カフェを始めよう」

囁く声は、秘密の企みを楽しむように、どこことなく弾んでいた。

「あなたと僕の、カフェだよ」

「…」

「店の名前とあの絵だけ残して、新しく、始めるんだ…」
頷いた僕は、そのまま穏やかな眠りに吸い込まれた。

* * *

目を覚ますと、変わらず彼に抱かれていた。

僕の枕に埋もれて寝息を立てている彼を見つめていると、胸が苦しいほど締め付けられた。

僕は、デイヴィッドに恋をしている。確かに自覚できたことが、ただ、嬉しかった。

彼を起こさないように静かにベッドを抜け、コーヒーを作った。

マグを2つ持つて寝室に戻ると、デイヴィッドは目を覚ましていた。

「おはようございます、眠れました?」

「…まさか、ベッドは狭いし、無理な姿勢だったから

全然」

「わがままに付き合ってくれてありがとうございます」

「起こしてくれればいいのに」とボヤいた彼は、まだ布団を被つてもぞもぞしている。

ベッドに掛けてマグを渡すと、彼は「ありがとう」と体を起こし、「シャツが皺くちゃだ」と顔をしかめた。

「朝からちゃんとコーヒー淹れてるの？」

「まさか、インスタントですよ」

「そっか」

「カフェをやつてたつて、プライベートは効率重視です」

「幻滅した」

「残念です」

「冗談」

彼はしょぼつく目を細めて、マグにちびちび口をつけている。

「…あなた、仕事があるでしょう、早く行ったほうが」

「今日はサボる」

「繁忙期なのにな？」

「なんとかなるよ」

つまらなそうに僕を見つめた彼は、のんびり大きなあくびをした。

「マイケル」

「…随分、馴れ馴れしいですね——」

「そうじゃないほうが、もう、不自然だ」

ぐいところちらに身を乗り出した彼が、ふいに、真顔になった。

「…平気？」

僕を伺う口元が、僕を覗く強い瞳が、恋しかった。

頷いて、マグをサイドテーブルに置いた。

そして僕は、待ち合わせにしびれを切らした唇を、ゆっくり重ね合わせた。

彼は、僕の服の時間をかけて剥いだ。そして、胸の中心に押し付けた唇で「やつと捕まえた」と呟いた。

体に触れられたら、本当に「終わり」が始まってしま
うかもしれない。

心のどこかで消しきれなかった恐れを、脇腹から胸へ
這う指の感覚が拭つていく。

知らない彼を知りたくて、僕は、何度もデイヴィッド
の名を呼んで、囁く唇で彼を確かめていた。

彼の唇は僕の肌を滑りながら笑い、痛いほどの愛撫で、
来世まで残るような痕を残していく。

彼を腕に抱ける喜びに気づくたびに、僕は、涙が溢れ
てしまう。

彼はそのたびに切なく笑って、体を激しく繋げていて
も、器用に僕の涙を唇で拭った。

座位に辿り着いた僕らは、互いを縛り付けるように抱
き締め合つて、我を忘れて腰を振った。

彼は僕の胸に頬をなすり、首を吸い、耳に愛を囁いて
は胸に辿つていく。

頭を抱いて、頬に触れて、口づけを求めれば、彼は貪
欲に伸ばした舌で僕を満たす。

擦り切れるほど僕を擦りつけ、彼のペニスで快感を貪
りながら、体で奪い合う確かな悦びに声を上げる。

…そういえば、かつての「僕ら」も、好んで座位をし
ていた――

ふと蘇る記憶は、たちまち淫らな愛撫と声に掻き消さ
れて、やがて僕は、デイヴィッドと昇りつめる快楽し
か見えなくなつた。

白く、安らかな恍惚とつつつの狭間を、ふわふわと漂つ
ていた。

背後から僕を抱く誰かが、僕の投げ出した腕をくすぐ
るような軽さでなぞつて、手に手を重ねた。

二度とはぐれない強さで、柔らかく、優しく僕を繋い
でいるのは――

「……でいづいって？」

後頭部に鼻を埋めた彼が「ウン」と答えて、我に返つた。

「……いてくれて、うれしい」

彼は鼻でふふつと笑い、まだ熱を帯びる肌を僕に擦り

寄せた。

「…すごく、しあわせ」

僕の手を握る手を握り返し、繋いだ手を胸に押し付けてみる。

後頭部で遊んでいた唇が「大丈夫？」と耳を食んだ。

顔を向けると、目と鼻の先で、彼が幸せそうに微笑んでいる。

「も一回する？」と犬歯を見せた唇を避けて、もう一度、体を委ね直した。

幸せの一言にはとても込めきれない幸せを、伝えられたらいいのと思う。

「…このままが、いい」

彼は「ウン」と同意して、僕に巻きつけた長い手脚に力を込める。

そして僕は、心地よい眠りに吸い込まれてしまう。

目覚めた時には、昼に近かった。

「…ヤバイ」

起きようとしても、デイヴィッドが絡みついて離してくれない。

「店の準備しなきゃ——」

「臨時休業でいいじゃん、あなた、昨夜はタイチヨウフリヨウだったし」

のんきな声を、憎みきれないのが悔しい。せめて、無責任な腕枕に非難を込めて嘯み付いてやる。

「…君は、職場に連絡した？」

「したよ」

「いつ？」

「朝、あなたがコーヒー淹れてた時」

「…そう…そういえば君、僕のフラットが店の2階つてどうして——」

「確認してあった」

ねえ、と僕の肩を嘯んで、腹を撫で回した指を下腹部に滑らせる恋人は、抜け目がない男だ。

「…しないよ」

「わかったから、ちょっとこっち向いて」

諦めて彼へ寝返りを打つと、デイヴィッドは思いがけなくシリアスな顔をしていた。

「…聞いて、いい？」

躊躇^{ためら}う唇が歪んでいて、僕の前世のことだとわかった。

「……いいよ、言つて」

「…過去のあなたにも、それまでの前世の記憶はあった？」

「…たぶん、なかった…僕が初めてだと思う——」

「じゃあ、ますます確信が持てる」

「…？」

「あなたはもう、過去を繰り返すあなたじゃない」

眩しい笑顔に吸い込まれて、ぶつかる額に我に返れば、すれすれの唇に焦らされている。

「もつと、僕に甘えて…」

抗えない、低く優しい囁き。

「あなたがめちやくちや欲しい」

吐息は唇に塞がれて、「僕も」と答えた舌は彼の舌で溶ける。

体が慄^{おの}くほどの痺れる快感は、僕の過去を乱暴に引き剥がしてくれる。

彼の腰を強く引き寄せて、僕に落ちる腰を腰で迎え入れて、もう離さないと口づけて、指先に込めながら、頭も体も壊れてしまいそうほど繰り返した。

* * *

結局、ベッドを出たのは14時になる手前だった。

「一緒にシャワー浴びよう」と甘える彼を、「バスルームで日が暮れる」と振りほどくと、彼は「そうなる」とニヤニヤしていた。

ちゃんと起床して風呂も済ませた僕らは、まず、昨夜のままの店内を片付けた。

デリはまだ食べられるものばかりだったが、僕は、外の空気を吸いたかった。

「カレーでも食べに行かない？」

僕の提案に、デイヴィッドは「もちろん」と笑い、「腹

ペコ」と片付けを急いだ。

外に出ると、空には爽やかな水色が広がっていた。

「せつかくだから、歩きでもいいかな？」

「全然、どこ？」

「メルボーン・ハイ・ストリート」

「コンランシヨップがあるね」

「そう、あのあたり、美味しいグリーン・カレーが食べられるパブがあるんだ」

「いいね」

住宅街を抜けて、リージェンツ・パークへ向かう僕の右を歩く彼の足取りは、軽い。

「地元民のルートだ」

きよろきよろと辺りを見回しながら、彼はさりげなく僕に歩く速度を合わせた。

「…あなたの前世の話は、あまりする気になれないんだけど…」

「何、いいよ、気になる」

「それぞれの、記憶が出てきた時期」

「うん」

「あれって、その時のあなたと僕が出会った時期じゃないかなって」

「…そう、かも——」

「たぶん当たってる」

「わかるの？」

「僕じゃないけど、『僕』のことだからね」

得意そうに目を見開く彼が、大好きだと思う。

「…正直なところ、残りの98の記憶にも興味がある」

「むごい死に様を知りたい？」

「冗談、やめとく、あなた、また泣いちゃうから」

「平気だよ——」

「怪しい、泣かれると正直キツイ」

「…もう泣かない」

そして僕らは、運河を渡ってリージェンツ・パーク内を南へ歩いた。

園内の木々は青々とした葉を茂らせ、小ささまざまな

ガーデンには春を謳歌する花々が咲き乱れている。

「コーヒー奢ってあげる」

「自分で払うよ」と懐を探る彼を尻目に、オーブン・エアー・シアターの側のカフェスタンドに向かった。

「君が律儀にくれたチップを使うからいいよ」

「律儀に分けてんだ」

彼がニヤニヤしてるのがわかったから、振り返らなかった。

コーヒーを手に、僕は、ローズ・ガーデンに足を見た。

5月の上旬。80種を越える色とりどりのバラが1万本、見頃のシーズンを迎え、その一輪一輪が我こそが最高だと言わんばかりに咲き誇る眺めは壮観だった。

特に申し合わせもせずベンチに並んで掛けた僕は、しばらくの間、バラやそれを愛でる子供連れのファミリーや観光客の姿を眺めていた。

「…マイケル」

「うん」

デイヴィッドを見ると、彼はどれかのバラか、もしくはどこか遠くを見ていた。

何かを懐かしむように、愛おしむように細めた柔らかな尻が、好きだった。

「…これから僕達は1000回だって巡り逢って、そのたびに10年後も20年後も、50年先だって、こうして並んでバラを眺めてる」

「…うん」

彼は「わかるんだ」と微笑んで、コーヒーに口をつけた。僕は「信じるよ」と呟いて、コーヒーに口をつけた。

「…でも、さすがに50年は厳しい」

「健康第一だ」

クスリと笑った彼は、突然「ねえ、昨日の話なんだけど」と朗らかな声を上げた。

僕を見つめる瞳は、日差しを浴びて透き通り、まるで子供のようにきらきらしていた。

「どの話？」

「僕達のカフェの話」

「うん」

「ただの思いつきなんだけど…店の名前さ、やつば変えない？」

「なんて？」

「Hummingbird “Hummingbird Cafe”」

「Hummingbird (ハチドリ)」

「そ、Hummingbird」

「どうして？」

「かわいくない？ハチドリ」

「かわいい」

「かわいいし、明るい感じもして、イイと思う」

「うん、すごくイイ」

「決まりだ」とはしゃいだ彼は、長い脚を跳ね上げてぴよんとベンチを立つと、「早くカレー食べ行こう、腹減りすぎ」と笑った。

「結構辛いよ」

「一番辛くしてもらお」

「マジで？やめといたほうがいい、僕はシーフード入りにする」

「何それ僕もそれにする」

パークを抜けて大通りへと出た僕らは、余裕のある歩道を肩を寄せ合って歩いた。

僕の胸は、ホバーするハチドリみたいに浮足立っていて、我ながら単純だと少し恥ずかしくなる。

そして、彼を盗み見たつもりが、目ざとく気づいた彼は「わかつてる」と言いたげに笑ってみせた。

平日の夕暮れ。ハイ・ストリートには、ビジネスマンや仕事帰りの人々が忙しく行き交っている。他にはぼつぼつ観光客らしき顔が見えるだけで、仕事をサボって遊んでいるのなんて、恐らく僕らしかいなかった。

「お店、どのへん？」

「こつち」

デイヴィッドの手を取って、僕は、目当てのパブへと

向かった。

(おわり)

かいせつ

露の宇侵攻がキツくて「戦争がない世界」を願って書いたのでもちよつと特別な一作です。BLに込めることかゝ？感もありますが、自分なりの表現を考えた時にこれしかなく、この「戦争がない未来を信じるお話」ができました。

…ふたりの距離が少しずつ縮まっていくのがいいですね。このお話はスケベは重要じゃないのでさらつとですが、好きです。いざHする前、前夜失神もしてるトラウマ持ちのmさんに「平気？」って聞くdさんがイケメン過ぎて最高です、顔もいい、ハ―最高しかない。

この先、末永く幸せに寄り添って生きて、来世も1000年も2000年先も繰り返して巡り合つては戦争のない世界で添い遂げる。

そんな幸せなふたりの始まりを描き出したものです。

(2022年3月18日 pixivに公開)

アクアブルー

ロンドンの金融街。

クラシカルな街並みに近代的なオフィスビルが生える
ここの東に、とりわけ異質な高層ビルがある。

住所から「30 St Mary Axe」と味気なく命名された
この建物は、地面から突き出たミサイルのような形状
で、きゅうりのピクルスに見立てて「ガーキン」の愛
称で呼ばれている。40階建ての上から3フロアはレス
トランやバーだが、その下層は全てオフィス用で、テ
ナントは国際的な保険や金融、法務関連、マーケティ
ング会社などが占める。

建設当初、歴史ある景観を損ねると知識人達から猛反
発を食らったこのビルも、今やロンドンのアイコンの
一つに数えられる。それでも、他のビル同様、界限の
人間でなければ、この中に「何」があるのか、毛嫌い
していた人々ですらよく知らず、そして知りようもな
い。

そして今夜、僕は、このビルの知られざる一面を、知
ることになる。

* * *

僕のオフィスが入る特徴的ではないビルからガーキン
まで、歩いて約10分。少し遠回りをして馴染みのパブ
で腹を満たし、22時を過ぎた頃、ガーキンのエントラ
ンスに足を踏み入れた。

聞いていた通り、レセプションの守衛に「Aqua
Blue」と刻印された銀のカードを手渡すと、彼は
機械的にそれと僕を4度交互に見た。そして、フロア
奥のリフト（エレベーター）へと僕を導き、「34階へ」
とだけ言った彼を残してリフトのドアは閉じた。

20階には取引先があり、時折バーを利用するためそれ
なりに知っているつもりでいたが、このリフトの存在
は知らなかった。

エントランスから隠すように設置された2台のリフト
の片方の中で、22階のボタンを押してみるが、点灯し
ない。試しに10、30と押してみても、反応はない。34
を押すとボタンが光り、低い音と共にリフトが上昇を

始める。面白半分に40から25まで押してみた所でリフトが停まり、僕はこの階専用のリフトを降りた。

34階は、一見すると5つ星ホテルのエントランスホールと変わらなかった。ただ、それより幾分暗く、本来は装飾目的の強いシャンデリアや洒落た間接照明に光源を任せている。広いホールには実用より装飾のためと思われるソファとテーブルのセットが4組、間隔をあけて置かれていた。そして、僕の他に“利用者”の姿はない。

奥のレセプションに向かおうとすると、脇に控えていた男が僕の行く手を阻んだ。

暗くとも、使用人らしき彼のスーツは高価なビスポークで、その立ち振舞いは5つ星ホテルの使用人の比でないほど馴^{しづ}けられていることがわかった。

「失礼ですが――」

「ああ、これを」

銀のカードを差し出すと、彼はその両面と僕の顔を一

瞥した。そして「ようこそいらっしゃいました」と形だけの笑みを作り、僕をレセプション左の応接間に誘った。

応接間では、支配人代理と名乗る中年の男に数枚の契約書を渡された。先の使用人以上によく馴^{しづ}けられた彼の目は鋭く、エレガントな装いにも関わらず軍人を思わせる。

書類には、ここのルールが記載され、破れば最悪社会的に抹殺されるというようなことが書いてあるが、冗談ではないんだろう。

ざっと読み流し、最重要は「ここの一切を口外しないこと」と理解して、承知のサインをした紙を支配人代理に返した。

「紹介状と、お名刺をいただいてもよろしいでしょうか？」

「ああ……」

僕をここ、会員制の高級デートクラブ「アクアブルー」

に導いた銀のカードと名刺を渡すと、支配人代理は代わりに黒いカードを差し出した。

その片面には何もなく、裏返すと「5826」と数字があった。

「それでは、5826様、ご案内いたします」

支配人代理に促されて、応接間を出る。

彼についてホールの左中央の階段を昇ると、上階は高級ホテルのラグジュアリーフロアの趣と変わらない。廊下には厚い絨毯が敷かれ、ドアとドアの間隔が広い。そしてどの部屋からも小さな物音一つ聞こえず、静かなものだった。

「こちらでお待ちします」

真奥のルーム・ナンバー000のドア前で、支配人代理が振り返った。

「先程お渡しした会員証がキーになります」

「そう」

「くれぐれも紛失などなさいませう」

丁寧な声音の裏に、厳かな威圧がある。

契約書に、キーの紛失は即会員権剥奪だと書いてあったのを思い出し、ここはまるで軍隊か情報機関か、はたまたギャングの城だな、と思う。

「わかった」

「飲食のオーダーや、何かございましたら、遠慮なくフロントまでお申し付けください」

「ありがたい、じゃあ早速、あるならジャパンのウイスキーが欲しい、なければスコッチのいい物を適当にチョイスしてくれ」

「かしこまりました」

支配人代理は懇慫に礼をすると、きびきびと廊下を去っていった。僕から外れた彼の目は、最後まで僕を冷たく品定めしていた。

* * *

ルーム・ナンバー000は、高級ホテルのラグジュアリーなスイートそのものだった。部屋は南向きらしく、

視線の先の壁一面のはめ殺しの窓から、闇に浮かぶタワー・ブリッジとテムズ対岸のきらびやかな夜景が見えた。

リビングに踏み込むと、そこには既に、僕を待つ一人の男娼がいた。

「こんにちは、ご新規さん」

ソファから飛び跳ねるように立ち上がり、くるりとこちらを振り返った男の「なり」に、意表を突かれた。

「あ、ああ…」

あつけにとられているうちに男は躊躇なく僕に歩み寄り、僕の首に腕を回してしなだれた。

「まずは一緒に風呂に入る？ いきなりファックでも構わないけど、ああ、僕は食事は済ませてあるから平気だ、そこらへん気は使わないで」

黒いアイラインで囲んだ目が笑い、僕を嬉しそうに見上げていた。

よくよく見れば、黒いアイシャドウで塗りつぶしたアイホールは、くつきりとした二重まぶただった。恐ら

く黒く染めた髪は無造作にスタイリングされ、両耳にいくつかのボディピアス、ライダースに白シャツ、ダメージジムの黒いスキニーにマーチンのブーツを履いている。

パンクかゴス系「かぶれ」らしいことは一目瞭然だが、白目も瞳も大きな目元が際立つ童顔と、よい肌艶のせいで年齢が全く読めず、「年甲斐もなくこんな格好」also思いきれない。

そして見れば見るほど、何もかも「男娼」のイメージから遠くかけ離れている気がして、なんだか騙されたような気にすらなつた。

「…そうだな、まず、君の名前を知りたい」

手持ち無沙汰な腕を、とりあえず男の腰に回してみる。タバコと、しつとりとした甘いウッディのフレグランス（上質な物であることはわかる）が控えめに匂ったが、意外にもドラッグは臭わない。実際、その出で立ちにありがちな不潔さやだらしなさは微塵も見取れず、その好ましさが輪をかけて「男娼」感を薄めていた。

「僕はルシファー」

「本名？」

「まさか、アナタは？」

「デイヴィッド——」

「別に本名は言わなくていい」

ルシファーが、ウインクをした。

「本名だとは——」

「わかるよ」

「別に、本名を隠す必要はない」

「そう」

彼は笑みを深めると、僕の股間をそつと手のひらでさすった。

「…じゃ、フェラする？」

にこ、と笑った齒列は作り物のように綺麗だが、その

白さはごく自然なものだ。

「フェラは挨拶代わり？」

「誰だって好きだ」

にっとう角を上げ、べろりと伸ばした舌には、ボディ

ピアスの丸いキャッチが見えた。

「…まだそんな気分じゃない、酒でも飲んでからにしない？」

「頼む？」

「頼んだ」

その時、チャイムが鳴り、ルシファーはすると僕から離れてルームサービスを出迎えた。そして、サービングカートを押してリビングに戻った彼は、「ヤマザキの25年だ、ヤバいな」とボトルを掲げた。

「そんないい酒が出てくると思わなかった」

思わず吹き出した僕に、ルシファーは「歓迎されてる」とウインクをした。

「懐を測られてる」

「これはフェラしてる場合じゃないね」

彼は高い鼻筋にシワを寄せて笑い、「出会いに乾杯だ」とテーブルにグラスの用意を始めた。

ルシファーは当たり前のようにストレートとチェイ

サーをそれぞれ2つ作った。そしてソファの僕の側に掛け、酒のグラスをくれた。

目を奪われるほどの手際のよさに、確かにプロなんだなと感心したが、口には出さずに目で謝意を伝えた。

「乾杯」「乾杯」

グラスを嗅ぎながら彼は僕を上目で伺い、静かに酒を舐めた。そして、口に含んだそれをしばらく味わい、喉に流した後で「繊細な味だ」と溜息をついた。

僕も同じように酒を嗅ぎ、稀少な酒を味わった。カカロのようなビターさとフルーツの甘みが複雑に絡み合う風味は、フレッシユな芳醇さが独特だった。

「ああ、うまいな…」

「改めて、ようこそアクアブルーへ、初めてのキャストが僕って、アナタはかなりツイてる」

チェイサーの水に口をつけながら、ルシファーはウインクをした。

息を吐くようにウインクをするんだな、と無邪気な笑みを眺めながら思う。

「…気を悪くしないでほしい、正直驚いた——」

「僕が、ッらしくない」って？」

「そう」

彼はニヤリと笑い、ドライマングーを齧った。

「よく言われるから気にしてない、まあ実際、僕みたいなタイプは少数派だ、他はほとんどがモデルか俳優をしてる、たまにスポーツ系もいるけど…つまり、男臭いのから美少年まで選り取り見取りだよ」

「…君は、いくつ？」

「それって重要？アナタは？」

「36」

「そう、じゃ、そのちよつと上」

グラスに口をつけた横顔から朗らかさが失せ、途端に大人特有の余裕と氣息さを纏^{まと}い始める。

さめた目元を盗み見ながら、まるでカメレオンだ、と思う。

「そうか、それで…何をしてる人？」

「売り」

「じゃなくて、本業」

僕の問いに、ルシファーはうんざりと眉をひそめて、ドライフルーツの皿をこちらに勧めた。

「デイヴィッド、一つ言っとく。キャストのプライヴェートは詮索するべきじゃない、まあ答えるけど、僕も他のヤツらも、特に個人的な話は嘘っぱちだと思つたほうがいい。」

「わかった——」

「僕は、売れない歌手」

「売れないGREEN DAY?」

彼はじろりと僕を睨むと、言葉が続けた。

「心配しないで、ココじゃ僕は超一流、これまで“サービス”の質でクレームを受けたことは一度もないし、僕の客は9割りピートする。つまり僕は、これでもこの英国でトップクラスの男娼だ。」

どう?と軽く眉を上げ、酒を舐める彼に、それを誇るような意図は見えない。

「お喋りも得意?」

「好きなだけ、とにかく、僕はエンターティナーだ」

彼は大きな目を見開くと、大げさにツンと鼻を上げた。

「……とにかく、わかった、認識を改める」

「今夜僕を味わつてみて、不満なら次はちゃんと希望のタイプを伝えれば、もう僕と会うこともない、シンブルだ」

そう言つてまた、ルシファーはウインクをした。

アクアブルーのシステムは、完全予約制だ。事前に電話をし、希望のキャストと日時を取り決める。今日、つまり全く初回の予約時に、「タイプに特に希望はなく、空いている男なら誰でもいい」とだけ伝えていた。高級クラブなら、そうそうハズレを引くことはないと思つていたが、その結果、あてがわれたのがこの彼だった。

「希望のタイプ：特になかった」

「ない?」

啜えたタバコにジッポーで火をつけながら、彼はおかしそうに僕を見た。

「禁煙だろ？」（※英国は屋内全面禁煙）

「ここは治外法権、吸う？」

「じゃ、遠慮なく」

彼のシガーケースから一本もらうと、ルシファーは咥えタバコを突き出した。

その火種で火をつけながら、ごく間近で彼を覗いた。

伏せた目のまつ毛は長く、深い緑がかった灰青の瞳は、ただ、綺麗だと思った。鼻は高く、つんと上向いた鼻先は頑固そうに見える。形のよい薄い唇は上品なほどで、とても、男のモノにしゃぶりつきたいようには見えない。

そして伏し目になると、幼い容貌が危うい色気を帯びて、確かな美人だと思った。そして恐らく、ただでさえ目立つ目を強調するアイメイクは、整った顔立ちのバランスを崩すからしないほうがいいと思うが黙っていた。

「…それで、君は、ゲイ？」

ルシファーは、フンと鼻で笑った。

「僕にそんなに興味が？」

「まあ——」

「バイ、つて言つとく、ココじゃ受け専、稼げるからね」

「そうか」

「じゃあ、聞くまでもないけど、アナタ…もうきみでいい？ きみはゲイ？」

退屈そうな問いが、煙と吐き出された。

タバコを挟む指と手首を、ごてごてと安物でないシルバーのアクセサリーが飾っていた。脱いだらタトゥーの一つや二つくらい、もしかしたら全身を埋めているんだらうとぼんやり思う。

「違う……わからない、そんな自覚はない」

僕の返答に、彼は不審者を見るような顔をした。

「男を希望して？」

「なんとなく、女を選ぶよりいいと思って——」

「どうして？」

「妻が死んだばっかだ」

ルシファーはさりげなく顔を背け、さっぱり「お悔や

みを」と小さく煙を吐いた。

僕も「どうも」とふかした煙で返した。

「…いつ？」

「先々週、葬儀が一昨日——」

「ココには、奥サンを忘れに？」

「…別に、葬儀の後の茶会で、ここの紹介状をもらっ

たから来てみただけ」

「なるほど」

ルシファーは、ハハッと愉快に笑った。

「？」

「きみ、全然悲しそうじゃないからさ、かえって信頼

できる」

「どうかな…」

「紹介したソイツなりの慰めなんだろうね」

「彼の意図は知らない」

「取引相手の重役ってトコだろ？『楽しめ、今後と

も『よろしく』、ってことだよ」

「？」

「ココは信頼第一だ、揺るぎない地位と確かな懐があつて、そうそう簡単に口を割らないと認められたヤツしか来れない、特権階級に昇進おめでとう」

タバコを灰皿でもみ消す横顔はただ義務的で、その人形みたいな顔は、なぜかとても綺麗に見えた。

「…そうか」

「ペナルティはわかつてるね？」

「さっきサインした」

「オーケイ、じゃ、そろそろココのシステムとルールの説明をしよう」

ルシファーはぐいと酒を飲み干して、「初回はこれが

面倒」とボヤいた。

「ココはどうして、アクアブルーっていうの？」

「そんなこと気になる？意味はない、きみの名前も僕の源氏名も、ココじゃ記号に過ぎない」

「そうか」

そして彼は「こつからは嘘はない」と真顔で水を飲む

と、こちらにまっすぐ体を向けた。

「朝まで一晩、基本40万、後はブレイの内容で加算されてく。例えば、キス1回で1万、ディープキス1回で3万、フェラの1抜きで25万、それにかけた時間分を加算する、こんな感じ。基本以外は歩合になるから、キャストは頑張る。」

「全部数えてるの？」

「もちろん、でも実際の会計はどんぶり勘定。一回ファックしたら、500万くらいだと思ってくれればいい。きみが蛋白ならもう少し少ないかもしれないし、キャストの機嫌が悪ければトータルに倍掛けするかもしれないし、僕はする。」

そう言つて、彼は悪気なく笑つた。

「…つまり、全部キャストの気分次第？」

「そう、天井はない、女のトップモデルなんかは、一晩で2000万請求するのもある…まあ心配しないで、よつぽどじゃなきゃ非現実的な金額を請求したりしないよ、たぶんね」

「問題は？」

「お互いじゃない、まず、ココの客は明細を気にするよ
うな連中じゃない、なぜならキャストは客の望みに
なんでも応えるから——」

「なんでも？」

ルシファーはくすりと笑い、僅かに目を細めた。

ふいに熱を帯びた眼差しを突きつけられて、僕は思わ
ず息を飲んだ。

「例えば一晩中足の指を舐めろつて言われたら喜んで
する…例としてはかわいすぎるけど——」

「君の、取り分は？」

「きみは知らなくていい、けど、良心的とだけ言つとく、
じゃなきゃ売りして生きてない。それに関連して、キャ
ストへのチップは禁止。」

「どうして？」

「ココがピンハネできない」

「チップはそういうものだ」

「その分勝手に会計に乗せるから気にしないで。それ
から、連絡先の交換、ココ以外での接触・交際も禁止。

そういう行為は、いずれ個人的な交際に発展する。」

「それはまずい?」

「もちろん、ここはマッチメーカーキングする所じゃない、あくまでも性的サービスを提供するだけだ、太客が現れるたびにキャストがいなくなったら困る」

「…万が一、それでもそういう関係になったら?」

「キャストはだいたい辞める、それは自由」

「買い上げみたいなルールはない?」

「身請け?、ない。キャストはあくまでも個人事業だから。で、そういう場合、相手の客は退会もしないでココに通い続けるヤツがほとんどだ、業が深いよね。」

「そうか」

ルシファーは一息つくと、新しいタバコをふかして続けた。

「じゃあ禁止行為。契約書にもあったと思うけど、ドラッグの持ち込みは禁止、理由は勝手にオーバードーズで死なれちゃ困るし、キャストも危険に晒される。ドラッグが欲しければココが提供する、ただし、基本

的にオーバードーズしない量までだ。同じ理由でおもちやも持ち込み禁止、何が起こるかわからない。だからココで用意されてるものを使い、マニアックなやつから最新の物までなんでもある。つまり手ぶらで来い、むしろ親切だろう?」

「ああ、ドラッグの種類は?」

「シヤブ以外はあ、精力剤やバイアグラなんかも。あと、一切の録音、撮影も禁止、理由はいちいち言わなくてもわかるね?セルフイーで2シヨなんでもつてのほか。」

「うん」

「他には、むしろこれが最重要、キャストの体を故意に傷つけるプレイ、プレイでも絶対だめだ。後はうっかり死ぬプレイ、首絞めとかね。」

「そんなことしない——」

「と思うだろ?それがしたがるヤツは結構いるから言ってる。で、SMとかの専門的なプレイは専門のキャストがいて、それ用の部屋もあるから、予約時に希望

を伝えればちゃんと遊べる。まあソフトなSMなら通常キャストでも大丈夫、僕もソフトなやつなら全然平気だし、ここにも多少の拘束具なら常備してる、鞭や蠟燭ろうそくはないけどね。こちらへのプレイの境目がわからなければ、予約時に具体的な希望内容を言えばその通りにセッティングされるから、そうして。命に関わらなければ、どんな変態的なモノでも構わない；当たり前だけど、猥褻以外で。」

ルシファーは「ヴウ」と唸って歯を剥くと、突き出した舌でべろべろと宙を舐めた。

「結構厳格なんだ」

「その代わり、お互いに限りなく守られる、きみに守秘義務があるように、キャストにも課せられる、リールでもすれば最悪消される」

彼はおどけて、タバコを挟んだ指をこめかみに当てる
ジェスチャーをした。

「…方が一、死んだら？腹上死とかあるだろう？」

「客なら穏便な死因で自宅に帰り、キャストなら適当

に処分される、世間を騒がせることはないけど、そのリスクと手間をなるべくかけたくない」

「理解できる」

「一番大切なこと。キャストは奴隷じゃない、嫌がるプレイを強要しないこと、場合によっては即バンされるから、よく覚えておいて。概ねどのキャストもNG行為があるから、プレイ前にちゃんと確認しておくといい。」

「君のNGは？」

「喉を掘るイラマチオ、したければ他のキャストを選んで」

「わかった」

「だいたいこんな感じだ、何か質問は？」

タバコを揉み消したルシファーは、チェイサー用の水のボトルをダイレクトに半分ほど飲み干した。

「ないよ」と答えると、彼は満足気に笑い、ふうと肩の力を抜いた。

今の今まで、まるで他人事のようにペラペラとお決ま

りを述べていたのに、ふいに気を緩めたその笑みの柔らかさに、思わず目を奪われていた。

新規の僕を迎えた彼は、まるでピエロに見えていた。それが、言葉を交わせばくるくると色を変え、時に別人のような顔になり、愛くるしく笑ったかと思えば呆れたり、疎ん^{うと}んだり、ふざけたと思えば虚ろな目をしたり、かと思えば熱っぽい目で僕を誘っては、気のない顔でそっぽを向く。記憶に留める間もなく、どれもが儼く移ろつて、本当の顔がよくわからない。

単なる好奇心でも「素の君を知りたい」と言うのは、ココでは「違う」んだろうと思つたところで、いつの間にか彼に引き込まれていたことに気がついて、さすがプロだな、と感心していた。

そして、僕の視線に気づいたルシファーは、「じゃ、次はハーフロックにする？」と酒のボトルを指して笑つた。

「…君、よく喋るね——」

「これも仕事だ、初回レクで一万」

「キスと同じだ」

「…したい？」

囁く口元が、気づけば目と鼻の先にあつた。白い肌に映える唇の赤さに、目を奪われる。視界の端で、彼がジャケットを脱ぐのが見えた。

「わからない…」

口紅は、塗つていなかったはず。

その唇に伸ばした手に、彼の指が蛇のように絡みつく。

「ココに、何しに來たの…？」

ルシファーの唇が、そつと指先をくすぐつた。温かく滑らかな感触に、首筋がぞくりとする。

「わからない——」

「キスは危険だ、おすすめしない…」

クスクスと笑う吐息が、僕の唇を掠^{かす}めた。

妖しく揺れる瞳は、夜の泉のように底が見えない。

「…そう」

ほんの少し屈むだけで、その唇は捕まつた。

潜めたはずの溜息が、唇の隙で混じり合う。

『どうしたい？』と問う唇が、僕を優しく滑る。^{すべ}

『わからない』と答えた舌で、彼の吐息を嗅いだ。

重ねただけの唇を開くと、待ち構えていた舌が僕に滑り込んだ。

そして僕は、ルシファアの体に腕を回し、抱き寄せながらソファに背を倒した。

僕に馬乗りで屈み、口を吸いながら、ルシファアは腰を揺らしていた。

僕を探る舌は彼自身を教え、僕の股間を擦る腰は、ゆつたりと僕の昂りを待っている。

柔らかな舌の愛撫の中で、硬いピアスが彼を主張していた。

僅かな反応も見逃さず、的確に、丁寧に吸い取られる心地よさに、濡れた意識がふやけていく。ピターな唾液に喉が痺れ、息が上がる。

夢中で彼の頭を抱くと、ルシファアは喉で笑い、腰を強く擦って応えた。

ピアスが歯にかちりと当たり、その舌を強く舐れば、彼は甘い吐息を僕に注いだ。

引つ込んだ舌を追って、誘き寄せられるまま彼の隅々を舐め回す。嘸んだピアスを引つ張れば、喰み直した唇の中で何度でも舌を絡めあえた。

「ああ……」

ふいにルシファアが顎を上げ、我も忘れて繋げていた舌がほどけて離れた。

見上げた唇の端から、こぼれた唾液が顎へと伝い落ちる。

「きもちい……?」

僕を伺う目は、蕩けたように潤んでいる。ハアと肩で喘ぐ素振りも、まるで、本当に昂ぶっているように見えた。

「すごく、気持ちよかった……」

正直に答えながら、彼の嘘と本当など、考えても意味がないと思った。

「よかった」

本当に、幸せそうに笑う齒列が、眩しい。指を伸ばして、顎に伝う唾液を拭いながら唇へ辿ってみる。

彼は口を開け、僕の指にぬるい吐息をかけながら舌を這わせた。

「君は、すごくキスがうまい」

なんて、褒めるのも野暮だろうと思っても、言うべきだと思った。

ルシファアは本当に嬉しそうに笑い、僕に擦りつける腰を強めた。タイトなデニムの下で、既に彼はエレクトしているのがわかる。

「キスも、好きだけど…」

「お喋りと同じ？」

「きみのキスは、乱暴だね」

「ごめん——」

「好きだよ、いいんだ…ココでは、好きなことを好きなようにしていい」

「…そう」

「きみは顔がいいから、気分がイイ」

うつとりと笑い、くねらせた腰を押し付けるその様は、正しく男娼だった。

「ファックも好き？」

「したくなつた？」

「…わからない、けど、疼いた」

僕を伺う腰に手を回すと、シャツ越しにも肌は熱い。

「しゃぶる？」

彼はわざとらしく息を荒げ、僕の中指と薬指を舌をぬらぬらと巻きつけた。

「しゃぶりたい？」

「言って…」

ひっそりと喘ぎながら、囁く声は甘く、強く、淫らな欲求を強引に焚きつけられる。

「しゃぶって——」

「キツく」

「しゃぶれ」

「喜んで…」

ルシファアは悪魔のような顔で笑い、見せつけるよう

に唇をぐるりと舐め回すと、僕の下腹部にゆつくり這い下りた。

ルシファアークのフェラは、言うまでもなく上手かった。

彼の唇に吸い込まれた僕の半勃ちのモノは、その舌が5度サオを擦る前に完全に勃起した。

キスとは比べ物にならない、甘く優しい愛撫に、僕は喘いだ。生き物みたいな舌が纏わりついて、イイ所をたちまちに暴き出される。僕を知り尽くしたような粘膜と、ごつごつ擦れる金属に翻弄されて、キスとこれだけで丸裸にされた気になる。

見下ろせば、彼は、幸せでたまらない、そんな顔で僕を見つめながら、熱心に僕を愛でていた。

これが、愛されるということなのか？まるで本当のような錯覚に、戸惑った。それでも体は素直に悦んで、始めて3分もしないうちにこらえきれなくなる。

たまらず彼の髪に触れると、指をじつとりとした熱が炙った。

下卑た笑みを深めたルシファアークが、大きく頭を上下する。握り込んだ根本を強くしごき、絡める舌を早めながら、僕を腹の底から絞り上げる。

「ッ……！」

そして僕は、恍惚に濡れた瞳に見据えられながら、あつけなく達した。

快感に痺れた頭で、ルシファアークを眺めていた。

ペニスを押し揉まれる圧を感じて見ると、彼の喉が上下していた。美酒を煽るように、実際、先程の酒を飲んだ時以上にうまそうに精液を飲んだ彼は、僕を咥えたまま嬉しそうに笑っている。そしてしばらく、舌で転がしたりくすぐったりと気ままにいじくった後で、縮み始めたモノを強く吸うと、ちゅつと音を立てて口から僕を抜いた。

「……よかった？」

くたびれたサオを舌でちろちろと突つく彼は、子供みたいに楽しそうにしている。

「ヤバかった——」

「嬉しい」

彼はぱくりと亀頭を咥え、もう一度強く吸って喉を鳴らした。どうやら、残滓が気になるらしい。

「凄かった、全然歯が当たらないし」

「フェラには自信がある」

アイスバーでも食いつくようにペニスで遊んでいた唇が、イノセントに笑う。

「舌が意味わからない動きしてた…」

「ふふ」

「こんなにヨかったの、初めてだ…」

彼は満足気に微笑むと、すっかり縮んだ僕に啄むような口づけをくれた。

「男のカラダは男のほうがよくわかってる、だから同性の愛撫のほうに気持ちいい、これは僕の自論」

「フェラも好き？」

「別に」

自信があるとニヤニヤしていた彼は、途端につまらな

そうな顔をした。

「自分がこうされたら嬉しい、気持ちいい、つてことをしてるだけ」

「プロフェッショナルだね…」

「見直した？」

「別に疑ってたわけじゃないけど、見直した」

「どーも」

「そんなに精液がうまいのかつて、驚いた——」

「まさか、オモイヤリ、みたいなもん？」

「…」

「きみはあんまり臭わないし、顔がいいから、気合も入るよ」

「つていうか、新規の客にそういう…ホンネみたいなことバラして平気？」

「きみだから言ってる」

そう言つてルシファーは、何か意味深な目で僕を見つめたが、その意味はわからない。ほんの一瞬の、どこか遠くを眺めるような力のない目元は、どんなエロ

ティックな表情より色つぽく見えた。

そして彼はまた、艶つぽい顔を作ると、猫みたいにしなやかに僕の体を這い上がった。

「…そろそろ、ファックしたくなつた？」

胸を這う指がシャツのボタンを外し、ペニスから外れた指が陰囊をすくい、裏側をべちべちとノックする。

「…アナルで？」

「あいにく、他にアナはない」

彼は、可愛らしく首をすくめた。

「したこと、ない」

「奥サンとは？」

「しなかった」

「遊びでも？」

「ないよ」

「…そお、いたつてノーマルなんだ」

「…わからない——」

「試してみる？」

何度目かわからないウインクをした彼に、首を振った。

「…いや、いい」

興味はなくなかった。が、イッたばかりなのと、キスとフェラを知つただけでも、十分満足できたような気がしていた。

「たくさん射たから、溜まつてると思つてた」

思いがけず、ルシファーはけろりとした顔で起き上がり、邪魔な僕を押しのけてソファに掛け直すと、酒のグラスに手を伸ばした。

フェラの間に開けていたのか、股間のジッパーから、勃つたモノが豹柄の下着を突き上げてその形を覗かせている。

ペニスをしまい、スラックスを履き直して、僕も体を起こした。

「別に、君が、嫌とかじゃない——」

「わかつてる、気にしてない」

ルシファーは啞えたタバコに火をつけると、グラスに水と酒を入れ、マドラーで丁寧にかき混ぜた後で、きつちりと酒と同量の水を入れて、またよく混ぜた。

その、てきばきと酒を作る涼しい横顔に、見惚れてしまふ。彼がいるバーなら通つてもいいとぼんやり思つてみると、「ン」とグラスが渡された。

酒を舐めて頬を緩めた彼は、聞き逃してしまいそうなほど小さな溜息をついて、背もたれに深くもたれた。そして僕は、程よく回つていた酔いのせいか、恍惚の余韻か、ふわふわと緩む頭で、ただ、話したいと思つたことを口にした。

「…妻とは、理想を絵に描いたような生活をしてた」

「へえ」

彼は、どうでもいいと煙を吐くと、涼しいままの横顔で酒を啜つた。

「妻が死んでも、何も感じなかった」

「…」

「悲しみも、喪失感もない」

「……」

「…彼女を愛してたのか、わからない——」

「きみは、わからないことだらけだ」

呆れて笑い飛ばされても不快じゃないのは、事実だからだろう。

「ココで女を避けたし、まだ指輪してる、なんだかんだ愛してたんだろう——」

「指輪は、まだ籍が入ってるからしてる」

「……」

「…ただ、もつと、思ひやれたと思う」

「…」

「思ひやる、べきだった——」

「そういうのは、義務とするモンじゃないんじゃない？」

ルシファーは、ブーツの足をガンとテーブルに乗せた。そして、「たぶんね」と呟くと、深く吸つたタバコの煙を大きな溜息と吐き出した。

しんと部屋が静まり返り、楽しい話題じゃなかったなと反省したが、振り返つても、楽しいとラベルを貼れる話題はない。

無意識に溜息をついていた僕に、彼は黙つてシガー

ケースを差し出した。

「ありが——」

「いいよ」

「…ファック、しようか——」

「僕に気なんか使わなくていいし、それにもう、萎えた」
彼は「ホラ」と縮んだ股間を掴むと、わしわし揉んでみせた。

「…僕は厄介な客？」

「全然、むしろ楽で助かる」

「…」

「唯一残念なのは、リピートがないこと」

「君に不満はない——」

「そうじゃなくて、きみは、ココに来る必要がない」

「……」

彼は、「だろ？」と微笑むと、ぐいと顎を上げて酒を煽つた。

その、何も期待していない、冷たく憐れむような笑みも、綺麗だと思った。

そしてルシファーは「寝よう、添い寝も任せてよ」と腰を上げ、チェストからシルクのナイトガウンを二つ取り出し、片方を僕に放った。パープルのそれは、いかにもだなと、思わず苦笑いが漏れる。

その場で服を脱ぎ、着替え始めた彼を、タバコを燻らせながら眺めていた。

豹柄のブーメランパンツだけになったその体は思った以上に筋肉質で、見るからに健康的だった。肉は程よく締まっているが、ゴツすぎないメリハリが柔らかな輪郭を描いている。腰は男らしい太さがあるが、ヒップの位置は高く、女性のように丸い。見る限り、体毛のない体は、清潔感を感じる以上に扇情的に見えてしまうのは、彼が男娼だからだろうか。そして意外にも、見える範囲にタトゥーはなく、背に何かの絵柄がちらりと見えただけだった。

「じゃ、おやすみ」

そして彼は、手首や指のアクセサリーを外しながら、そつけなくベッドルームへ行つてしまった。

ほんの先程までの熱っぽさが、嘘みたいにつれないと少し寂しさを覚えた。本当に、どうしてココにいるんだろうと気付かされたバカバカしさと虚しさを、アルコールで麻痺させるためにグラスの残りを煽った。

着替えて寝室に行くと、ルシファーはキングサイズのベッドのど真ん中に寝転がり、スマホを覗いていた。

「…横、いい？」

寝台の側で伺うと、彼はスマホを放り出し、まるで待つてましたとはかりにニコニコと僕に手を差し出した。手を引かれるまま横に寝転がると、ルシファーは僕にびったり体を擦り寄せた。

「スマホ、見てていいよ——」

「お客サンという時は、ちゃんと向き合うのがルールだ」

「ココはきっちりしてるね」

「これは僕のルール」

「…君は、すごいな」

「理想の恋人として、サイコーの時間を提供する、それが僕の仕事」

ルシファーは体を起こすと、サイドテーブルから酒のグラスを取った。

まだ、寝る気はないらしい。

「…君の体、すごく健康的だ」

彼に体を向けると、ヘッドボードにもたれた彼は、僕に楽しそうな一瞥をくれた。

「いきなり何？興味ある？」

「…まあ——」

「体が資本だからね、ちゃんと食べるし、できる限りトレーニングもしてる」

「ちょつと驚いた」

「何が？」

「ロッカー？つて、細いのがクールなのかと思ってた」

「メタル方面はそうでもないし、それに僕はロッカーだなんて一言も言っていない」

グラスをあてた口元が、静かにほころんだ。

「…それに、脱いだら全身タトゥーだらけだと思つた」

「…『らしくない』？」

「男娼らしくも、パンクでもゴス系らしくもない」

「パンクともゴスとも言つてない」

「じゃあ何？」

「秘密」

含み笑いを浮かべた横顔はなんだか穏やかで、眺めているだけで先程の佻しさのようなものを簡単に忘れられた。

「…背中には、タトゥーある？」

「見えただろ？」

「よく見えなかった」

「…興味ある？」

「見て、みたい」

「じゃ、脱がしてよ」

ルシファーはあつげらかんと笑い、グラスをサイドテーブルに戻した。

起き上がり、彼に向き合つた。

本当ならば、このままキスをするのが順当だろうと思ひながら、黙つて彼のウエストのベルトを解いた。

静かにフロントをはだけると、薄暗い室内でも白い胸と腹はいやに眩しい。

そのつもりはないのに、否が応でも小麦色の乳首に目を奪われてしまうのは、彼が男娼だからだと思う。

「毛が、ないね」

「処理してる、『らしい』、だろ？」

「かも——」

「喜ばれるし、きもちいんだよ、男の体毛が肌に擦れるの」

「下も？」

「もちろんパイパン」

「…そか——」

「別に、珍しくもない」

きわどい上目遣いから目をそらして、肩から後ろへガウンを落とした。微かな衣擦れを立てて、ガウンが腕

を滑り落ちた。

露わになった肩は極端な撫で肩で、鳥が留まったら滑り落ちそうだと思ったら、なんだか少し笑ってしまっただ。

「何？」

「撫で肩だなんて」

「悪い？」

「鳥が留まったら滑り落ちそうだ」

「初めて言われた」

「…鳥になりたい」

彼がふつと吹き出し、肩が揺れる。

その撫で肩に唇を寄せると、ルシファアはするりと僕をかわしながらガウンを脱ぎ捨て、うつ伏せに横たわった。

ビーチで日光浴でもするように組んだ腕の上に頬を置いて、流し目をくれる彼は、本当に自然に、恋人同士のじゃれ合いを楽しんでいるようだった。

「どーぞ」

その背には、翼があつた。胸の裏あたりに付け根があり、肩まで伸びて折り畳まれた翼は背筋を下り、一番長い風切羽の先が腰と尻の境目に流れている。

「白い、翼？」

ほとんどが線のみで、陰の部分にしか塗りが彫られていないその絵柄は、そう見えた。

「…そう、そのつもり」

「天使、みたいだ——」

「そんなつもりじゃない」

クスクスと上下に揺れる翼は、今にも大きく開いて羽ばたきそうに見えた。

「じゃあ何？」

「色を入れたくなくて、白い翼つてことにしてるだけ」

「どうして？」

「僕の背中、キレイだから、タトウで塗りつぶしたらもったいない」

「だから、他の所にも彫らない？」

「そう、背中だけじゃない、僕は僕のありのままの体

が好きだ」

「…そう」

「ヒップ見てよ、すごく形がいい、自慢だ」

あえて見ないようにしていた尻をもぞもぞと揺らされて、目をやらずにはいられない。

締まった尻も間近で見れば異様に綺麗で、挑発的に僕をそその下着から目をそらした。

「…なんで、あえて翼を？」

「僕は、鳥みたいに自由、つてこと」

「…ああ」

「？」

「型にハマらない、君らしい」

「型にハマらない、それだ」

「…触つても、いい？」

「特別に許すよ」

指先でタトゥーのラインをなぞつてみると、墨を入れた部分がほんの少しだけ盛り上がっていた。右翼の付け根にそつと頬を乗せてみると、すべすべとした温も

りが気持ちいい。そして、日だまりの枯れ草のような、懐かしいような、不思議な体臭がする。少しすつとするその香りは、どこか、生物的ではない気がした。

「…君は、天使みたいだ——」

「冗談、ウケる」

頬がじんと震えて、彼が笑ったのがわかった。

「…堕ちてるフリをしてる、天使——」

「しつこい」

左翼にあてがった手を流れに沿って滑らせると、密やかな溜息が聞こえた。

「…メイク、取らないの？」

「取りたくない」

「…ないほうが、いいと思う——」

「余計なお世話」

「取ったら、もつと天使だ——」

「うるさいな」

両翼の付け根の間に唇を押し付けてみると、その体に少しだけ緊張が走った。

言いたいことを言つて満足した僕は、ただこうして触れているだけで、温かいもので満たされていくような気がした。

ルシファーは、背中に張り付いた僕に、黙つて好きなようにさせてくれた。

囁くような吐息を聞きながら、僕は、寝落ちしてしまうまでずっと、柔らかな翼に触れていた。

* * *

翌朝。目を覚ますと、ベッドに一人だった。時計を見ると、のんびりはしてられない時間だった。馴染みのない部屋なのに、随分深く眠れた気がするの、酒だけのせいではないと思う。

リビングでは、ルシファーが朝食を食べていた。

テレビは意外にも国営放送のニュースがついていて、テーブルには豪華なブレックファストがずらりと並んでいる。朝食は、僕の分もあるらしかった。

「おはよ、先食べてた」

新聞から顔を上げた彼は、ぱくりとパイナップルを頬張った。既に風呂を済ませたらしい黒いバスローブ姿の顔は、きちんとメイクされていた。

「食べなよ、朝メシもちゃんとルームサービスがあるんだ、そこらのホテルよりイイよ」

「あんま時間ないんだ、風呂入ってくる」

「そ」

鼻歌まじりにトーストにジャムを塗る彼を見ていると、ココがデートクラブで、彼が男娼であることが、なんだか嘘みたいに思えた。

風呂と身支度を済ませ、テーブルの朝食からスモークサーモンとマッシュルームを立ったままつまんだ。

そして、部屋を出ようとすると、ルシファーにのんびり呼び止められた。

「もう行くの？」

「うん、昼から外せない会食があつて…」

腕時計から顔を上げると、ルシファーは目の前に立って僕を見上げていた。

「ネクタイは？」

彼は、まるで世のワイフがそうするように、僕のジャケットの埃を払い、ワイシャツの襟を整えてくれた。まだ少し眠たげな目元は、昨夜のどぎつい性的な毒気が抜けて、好ましい感じがする。

「オフィスに置いてある」

「そう」

「昨日の酒なんだけど——」

「ボトルキープ、できるよ」

「そう、したい」

「必要？」

「……うん」

「そう、わかった」

「……本当は、君がもらってくれればと思ってた」

「おもちゃだつてキープできる、ああ、言つてなかった、おもちゃは一度使ったら買い取りになるからね。つま

り、ココはそういうトコだから、置いときたい服とかがあるなら、持ってくればいいよ。」

ぱちんとウイंकをしたルシファーに、ああ、彼は男娼だったと現実引き戻される。一緒に過ごしたほんの12時間で、まともにセックスもしないのに、彼は確かに「理想の恋人」だと錯覚できるほど、完璧に演じきつていた。

「わかった……ああ、会計は——」

「キャッシュ、クレカ、請求書送付の振込、なんでも、好きな方法でできる」

「クレカで——」

「帰りにフロント寄つて、念のため言つとくけど、限度額には気をつけて」

「わかつてる……その、今日の明細だけど」

「うん」

「君の好きなように、つけていいよ」

「もうした」

無邪気に笑つたルシファーは、ぽんと僕の胸をタップ

した。

「そうか、よかった」

「うん」

「…ありがとう、いい夢を見た」

「それが僕の喜び」

彼は、当然だとばかりに高い鼻を突き上げた。

「それじゃあ…」

「気をつけて」

踵を返し、エントランスに向かった。

何も期待していない彼は、「またね」や「待ってる」とは言わない。そして、虚しく聞こえた「気をつけて」が、彼の思う最もふさわしい言葉だったのか、僕にはわからない。

「待って、デイヴィッド！」

ドアを開けた時、ルシファーに呼び止められた。

振り返ると、リビングに引っ込んだ彼が、「これ持ってた。」とオレンジジュースのパックをこちらに放った。

なんとかそれを受け取った僕は、「君は雑だな」と声を張った。

ドアが閉まる寸前、隙間から、ニコニコとタバコを持つ手を振る彼が見えた。

レセプションには、昨夜の支配人代理が立っていた。要求された会員証を渡すと、彼は僕とカードを一瞥し、事務的にタッチパネルを操作した。

ロボットのような「お支払いはいかがいたしましたようか」に、クレジットカードを渡し、暗証番号を入力してこの日の精算は済んだ。

彼がくれたA4の明細の詳細も総額も、見ないで畳んで胸の内ポケットにしまった。

「次の予約はいかがいたしますか？」と聞く支配人代理の目から、ついに警戒の色が消えていた。

「いや、いい…また電話する」

「かしこまりました」

彼に背を向け、丁重な「またのお越しをお待ちしてお

ります」を聞きながら、昨夜同様に薄暗いエントランスをリフトへ向かった。

リフトを待ちながら、ポケットのオレンジジュースを思い出し、取り出してストローを刺した。

地階（1階）に降りていくリフトの中で、ジュースを飲んだ。そしてふと、このパックを投げた彼のラフさを嬉しく感じていることに気がついた僕は、また、彼に会いたいと思った。

ガーキンの地階には、ここの裏の顔など知りもしないビジネスマン達が、忙しなく行き交っている。

ダストボックスにパックを放って、僕は、オフィスに向かった。

* * *

その4日後、アクアブルーへ電話をした。ルシファーを指名すると、翌週の金曜の夜に予約が取れた。

そう遠くもないが、近くもないスケジュールに、少し、

がっかりした。

それから毎日、金曜日を指折り数えて過ごしていた僕は、自覚している以上に暇で、退屈を持て余していることに気がついた。

2度目のアクアブルー。

レセプションで会員証を出すと、「いらつしやいませ、5826様、2つ上階のルーム032でございます」とだけ伝えられた。初回のような、部屋までの案内はない。不必要なやり取りはないココのあるべき姿は、とても好ましい。

今夜の部屋は、前回とさほど変わらない趣きのスイート・ルームだった。西向きの窓には、手前のセント・ポールのドーム屋根の尖塔と、その奥に連なるウエストミンスターの美しい夜景が広がっている。

部屋は薄暗く、リビングを覗いても、前回のように彼が歓迎に飛んでは来なかった。

テレビはつけっぱなしで、テーブルにはスナックの袋

とミネラルウォーターのボトルがあつた。

人の気配を感じてソファを覗くと、ルシファーが眠っていた。

「ルシファー？」

そつと肩を揺すると、彼は目を覚ました。そして僕に気づくと、少し慌てて、ふらふらと体を起こした。

「ああでいづいっど、ごめん、ねちゃつてた」

ソファに膝立ちになつた彼は、がばと僕の胴に抱きついた。

お約束らしい歓迎のハグにハグを返しながら、彼の様子が少しおかしいのに気がついた。

「どうしたの？」

ソファに掛けて覗き込むと、その目は虚ろで、肩がふわふわと揺れている。鼻につく甘い匂いには、覚えがあつた。

「葉っぱやったの？」

「ウン」

「大丈夫？」

ルシファーはへらへら笑い、また、僕に抱きついた。

「あんまり……ねえ、ふあつくしようよ」

「呂律が怪しいよ」

「……んん」

「大丈夫、じゃないね」

「んん……」

僕にしがみついたまま、ぐつたりとしてしまった彼を抱えて、寝室へ運んだ。

ルシファーをベッドに寝かせてから、リビングに戻つた。カウンターキッチンには、前回キープしたウイスキーと、氷の入ったアイスペールやグラスが一式、トレイに用意されていた。

それを持って寝室に戻ると、ベッドに体を投げ出した彼は、変わらずへらへらと笑っていた。

「……ごめん」

「いいよ」

「よくない——」

「だろうね」

寝台に掛け、酒を準備していると、彼が「ちょうだい」と手を伸ばした。

「君はこれ」

水を渡すと、彼は不満な唇を尖らせたが、大人しくボトルを受け取った。

そして僕は、適当に作った酒のグラスを持って、ベッドの彼の横に座った。

「…まさか、きみ、またくるとおもってなかった」

「いい酒をキープしてた」

「そのため？」

彼はふつと吹き出した。

「それに、ぼくをしめいするなんて——」

「君が言つてた、『僕の客は9割りピートする』って」

「ふふ」

「…僕は、君の客だ」

「うれしい」

「…」

「ふあつく、していいよ、しりがゆるゆるで、いれやすいから」

「…どうして、ゆるゆる？」

「ひるの、きやく」

「…そんなにしたの？」

酒を舐めると、なんだか味が薄いような気がした。

「よじかん、いかされつばなし」

「葉っぱ吸って？」

「そう」

「オーバードーズしない量って言つてた」

「…なんか、きまりすぎちゃって——」

「くたくた？」

「うん」

水を飲み、ボトルを抱えたルシファーは、僕にもぞもぞと体を擦り寄せた。

僕の腹に回す腕や、収まりのよい姿勢を探す腰つきは、無意識ゆえか、無防備さが異様に色っぽい。

「…君は、24時間売りしてるの？」

「まさか、きょうはたまたま、ひるきぼうのきやくがはいつただけ、いれぎゆらー、きほんは、よるだけ」

「…休みは、ある？」

「ない…けど、すいようはやすみにしてる」

「連休、作ればいいのに」

「いいんだ、よやくがなければやすみにするし」

「そんな日はある？」

「あんま、ない」

クスクスと笑い、僕のグラスに伸びた手を「だめ」と掴んで、そっと下ろした。

「あと、たまにどうい、やすむ…」

「たまに？」

「くらぶでうたうひ」

「…どこのクラブ？」

「かむでんのまーけつとのうら、すてーぶるず…」

「エイミー・ワインハウスと歌った？」

「…なんどかねたよ——」

「嘘だ」

彼はまた、クスクス笑うと、少し水を飲んだ。

「じゃあきみは、ひるは、どんなえらいしごとをしてるの？」

「投資銀行のえらい人」

「わかいのに、すごいね」

「妻の親父さんが会長で、僕はコネ入社だ」

「ふうん」

「でも、数字に強いから、あつという間に役員になった」

「できるおところはすぎだ」

「安く買い叩いて高く売る、ただの数字ゲームだ」

「いばつてるようにきこえない」

「威張つてない」

「もつと、えらぶつていいよ」

「意味がない」

「みんなえらぶる」

「…それで君は、なんで…この仕事を？」

「……むかし、いいばいとかあるつてさそわれて、それから…しようにあつてた」

「…」

「ほんとじゃくえないからね」

そう呟いた彼は、ハハッと乾いた声で笑った。

「…」

「らくにかせげるし、てんしょくだ」

「…そう」

「…ねえでいづいっど、おわびにふあつくしていいよ」
へうへうしているが、その目は、どこか、必死に見えた。

「…今日はもう十分だろ」

「ただにしとく」

フラフラと体を起こして、僕に迫るルシファアの体を抱き寄せた。

僕の胸で、とろんと溶けたように笑っている彼は、どうにも危なっかしい。

「そんな気分になれない」

グラスの酒を口に含み、彼に口づけた。

静かに顔を傾けると、察しがいい彼は喜んで口を開く。その唇にアルコールを注ぎ込めば、僕の唇ごと吸い

取った彼は、顎を上げてそれを飲み干した。

「…おいし」

上下した喉と、蕩けた目元が、なんとも艶っぽい。

「…ルシファア、君はとてもそそる」

「ン」

嬉々として、僕の口元に食いつきかけた唇を指で押さえた。

「…僕は男に興味がない、それでも、君に魅せられると、思う…」

黒く縁取った瞳を見開いたルシファアは、急に不安そうなる、複雑な顔になつて僕に抱きついた。

だから、僕も、彼の背に腕を回した。

「…なんで、きたんだ…」

「君に、会いたかった」

「……………」

「男に興味がないのに、変だと思う」

「…こうえい」

「…こんなくたくたになる日は、よくある？」

「めったに、ない」

ぼそぼそと、聞いたことのない低い声がした。肩の後ろに隠れた顔は、見えない。

体を労って、なんて言うのは、たぶん、余計なお世話なのだろうと思う。

「寝よう」

「……やだ」

「今夜は、僕が添い寝する番だ」

ルシファアの体を離して、シートにゆっくり横たえた。

彼は、とても困ったような顔で、僕を見つめていた。

「ごめん……」

「おやすみ」

彼の体に、布団を被せた。

「こんなつもりじゃ——」

「おやすみ」

彼の目の上に、手を被せてそっと覆った。

「……あったかい」

「おやすみ」

「……………」

ルシファアは、口を閉じた。

しばらく僕は、黙って、彼の目を覆っていた。

手のひらで感じる彼は温かく、時々、微かに震えるまつ毛にくすぐられた。

そして、僕が作った沈黙の間に、ルシファアは眠ってくれた。

かぎした手を離すと、眉に、疲れがこびりついているように見えた。

すうすうと繰り返す寝息を聞きながら、酒を飲んだ。その規則正しい呼吸は、とても清らかに聞こえて、僕はただ、それを聞いているだけでよかった。

* * *

翌朝。目を覚ますと、目の前の枕にルシファアの顔が埋もれていた。寝返りのせいか、枕カバーに黒いシャドウがこびりついた跡があり、アイメイクが薄くなっ

ていた。

出来心で、メイクを取つてしまおうと手を伸ばすと、目を開いた彼に睨まれたからやめた。

「…起こした？」

「結構前に起きてた、けど、布団が気持ちよくて」

眠たそうな目を閉じて、彼は腕を伸ばすと「ウウン」と伸びをした。

「そう、今何時かな」

「…10時くらい？…久しぶりに熟睡した気がする」

「そう」

確か、ココのチェックアウトは11時だった。

「デイヴィッド、今日は休み、でしょ」

「うん」

「夕方までなら、延長ができる」

「じゃあ、少し、ゆっくりしてく」

「普通なら、朝から一発ハメてる」

ルシファーが、伸ばした舌で見えないペニスを舐め上げた時、部屋のチャイムが鳴った。

「朝メシ頼んどいた、今日こそちゃんと食べよう」

舌をしまい、ぱつと飛び起きた彼は、僕の腕を強引に引っ張った。

朝食は、6つのサービング・カートのビュッフェ・スタイルで給仕されていた。

ルシファーはブ렉クファストを盛り付けた皿を二人分作り、トーストやフルーツ、ヨーグルト、牛乳などをてきぱきテーブルに並べた。

「腹ペコ」

僕のすぐ側に掛けた彼は、ポーチド・エッグをまるごと口に放り込んだ。

ウキウキとテレビに見入る様子はすっかりクリンで、僕は内心ほつとしていた。

「ニュースが好き？」

「別に、世間話のために知つときたいだけ…きみは、スクランブルエッグでよかった？」

僕の皿には、スクランブルエッグが乗っていた。

「僕もボーチドがいい」

「そか、持つてくる」

「いいよ、これで、たまには」

「あそう」

「なんでスクランブルエッグ選んだの？」

「好きそうだから」

「適当？」

「うん」

ルシファーは悪びれなく笑い、ベイクドビーンズをもりもり口に運んだ。そして、トースターからトーストを持つて戻り、一枚を対角に切つて三角にしたものをくれた。

「ありがとう」と受け取ると、彼は使い切りのスプレッドを僕の前に丁寧^{ていねい}に並べた。そして、咳払いをしてかしこまると、ひとつひとつ紹介した。

「バターにストロベリー、ブルーベリー、マーマレード、はちみつ、ヌテラ、マーマイト、ピーナッツクリームがございます、旦那様はどれがお好みですか？」

「マーマレード」

「へえ意外」

「君は、マーマイト？」

「はずれ、ヌテラ」

「意外でもなかった」

「じゃあ当てないと」

トーストにヌテラをたっぷり塗りながら、彼はぽつりと口を開いた。

「昨日さ」

「うん」

「ごめん——」

「何が？」

「：シヨクム、タイマン？」

「誰も、君を咎^{とが}めてない」

シリアスな陰^{かげ}がさした横顔を見ないようにして、トーストを平らげた。

「：」

「君もトースト、まだ食べる？」

「ウン」

「焼いてくる」

腰を上げると、彼は晴れ晴れとした顔を上げた。

「ねえ、ペーコンとトマトも持つてきて、あとそろそろお茶淹れて」

「わかった」

何事もなかったかのように、フォークでマッシュルームをつついてる彼を、つい盗み見てしまう。

食事の間は、男娼であることをすっかり忘れているような、力みのない姿が、いいと思う。

「お茶、なんか入れる？」

「ミルク」

「うん」

「ありがと」とカップを受け取り、ニコリと微笑む顔も、すごくいいと思う。

「…君が笑うと、嬉しい」

「何、いきなり」

ルシファーは、小さく笑ってカップに口をつけた。

「思ったことを、言っただけ」

「ミルク、もうちよつと少ないほうが好き」

「…思ったことは、最終的に、言わないと気が済まない」

「最終的に？」

「すぐに口にするのと、失敗に繋がることもある」

「なんか、苦勞した？」

彼は、タバコに火をつけた。

「そうやって、学んだだけ」

「…人が苦手？」

差し出されたタバコを咥えて、彼の咥えタバコから火をもらった。

間近で見る伏し目の彼は、出会った夜と変わらず、それどころか、明るい昼間に見ればますます美人だった。

「ビジネスの対人は楽、それ以外は難しい、大概計算通りにならない」

「頑張ってきた？」

「それなりに、日々勉強してる」

「えらい」

「…僕は、人がわからないし、愛とか恋とか、そういうのもよくわからない」

「よくケツコンできたね」

彼はぼすつとソファの背に埋めれると、大きく煙を吐き出した。

「妻が、好きになつてくれたから」

「……」

「ビジネス以外は、相手に任せる方が、うまくいく」

数時間ぶりのニコチンを深く吸うと、うまかった。

「…きみは、その苦手なことを、すぐ頑張つてきたつてわかるよ」

彼がぼつりと呟いたそれは、嘘でも嬉しいと思つた。

「そう？」

「ウン」

「…ねえ君、なんでタバコの火をタバコでくれるの？」

「したいから」

「そう」

「シガーキスっていう」

「そうか」

「…ねえ、一緒に風呂入んない？」

「うん」

しばらく、彼も僕も、黙つてタバコを吸っていた。

誰も見ていないテレビの天気予報が、心地よいBGMに聞こえている。

前日も、今回も。彼が男娼であるとしつかり忘れてしまえるような、この、穏やかな日常を切り取つたような時間が、好きだと思つた。

「先に入つてて」と言われるまま、浴室に行つた。

小さなプールほどのバスタブに浸かり、西の窓を眺めると、僕のオフィスが入つたビルが目と鼻の先に見えて不思議な感じがした。

「何見てるの？」

振り返ると、酒のトレイを抱えたルシファーは当たり前前に素っ裸だった。

つい、見てしまった陰部からそらした目を、もう一度

窓の外に向ける。気のせいでなければ、彼のペニスには、舌と同じようなピアスがついていた。

「僕のオフィスがある」

「こっちなんだ」

彼はトレイを脇のカウンターに置き、ジェットバスをオンにしてバスタブに入ると、僕の横に肩を並べた。

湯船にぼこぼこ泡が立ち始めたお陰で、その陰部は見えなくなった。

「この部屋、風呂から外が見えるから好き」

「そういえば、前回は見えなかった」

「開放的にファックできる」

「見られるの、好き？」

「外からは見えない」

「そうだった」

「酒飲む？」

「うん」

ルシファーはぎぶぎぶとカウンターの方へ戻り、膝立ちで酒を作り始めた。

湯から出た背の上半分に、あのタトゥーと、所々に見えるの赤い痣があるのが見えた。

「見えちゃったんだけど——」

「おちんちんのピアス？」

「あー……うん、そう——」

「気になる？」

「まあ、多少は……」

こちらに背を向けたまま、彼は小さく笑った。

「それ、邪魔じゃない？」

「邪魔って言えば邪魔、ゴムがつけられないから、女性に避妊してもらわないといけないし、尻は掘れない」

「そうなんだ」

「見る？」

彼はぎばと立ち上がると、両手にグラスを持って僕の前に来た。

目の前に突き出されたそれを甘んじて拝むと、亀頭の上面の真ん中から裏へと太いシャフト（軸）がまつすぐ貫いている。

「…痛かった？」

「そりやもう、でも、いいことだったてある」

彼はざばと肩まで浸かると、グラスをくれた。

「ありがと、…どう？」

「おちんちんの中を刺激できるから当然きもちいし、コレで擦られる女性もきもちい」

そう言つて、彼はうつとりと酒を口に含んだ。

「自分の体が好きだって言つてたから、意外だ」

「本当は、乳首にもしてた」

「どうしてやめたの？」

「両方の乳首に輪っかがぶら下がってるの、なんか間抜けに見えてやめた、見て、僕のキュートな乳首」

彼はまたざばと膝立ちになると、僕に胸を見せつけた。

乳首より、その周りや、鎖骨や、肩にかけて刻まれた愛撫痕が目について、グラスに口をつけて目をそらした。

「ペニスはいいんだ…」

「ウン、それはそれ、メリットがでかい」

ルシファーは肩まで浸かり直すと、僕の足の間に座つて、背中を僕の胸に預けた。

「出るものに支障は？」

「角度が変わるからおしつこはコツがいる、せーしはまあ平気」

「そうか」

「…何？」

滑り落ちそうな右肩に顎を乗せてみると、彼は僕の左の頬に猫か犬みたいに頬をなすつた。

まるで恋人のように、完璧に。あるはずのココロの垣根をたやすく乗り越えてしまふ、不思議な人だと、ようやく気づく。

左手を彼の腹に回すと、彼は左腕をそつと重ねた。

「…僕は、無精子だ」

「へえ、別に珍しいことじゃない」

僕の左肩に頭を乗せて、彼はのんびり笑つた。

「…でも、子供を作らなきゃいけなかった——」

「誰のために？」

「…」

「無理なことは無理だ」

くだらないと笑い飛ばしてもらえただけで、何か、胸が軽くなる。

「…妻が浮気してても、見て見ぬフリをしてた——」

「平気だった、だろ」

「ちゃんと夜の生活は、あった」

「よく頑張りました」

彼が掲げたグラスに、グラスをぶつけた。

「夫婦を、維持してた」

「…えらいじゃん」

「空虚、だった」

「…何年？」

「13年——」

「気が遠くなるね」

「…今になれば、あれは、なんだったんだろうって、思う」

「ただのそういう人生だ」

「……」

「空虚なりに、そういうもんだと思って、生きてたんだろ？」

「…そう——」

「僕から言わせれば、きみはただの恵まれてる男だよ、ちよつとばかりアイに疎くて、タネが欠けてるだけの、クソがつくほど幸運な男だ」

その声に苛立ちが見えた気がして、僕は黙った。

「なのに、ようやく手に入れた自由を持て余してる」

「……」

「…ねえ、デイヴィッド、きみはどうしたい？…仕事以外で」

そんなことを考えたこともなかった僕は、一瞬、彼の言った意味すらよくわからなかった。

「……わから、ない」

「何が欲しい？…何が望み？」

「…わからない——」

「だろうね、聞き飽きた…」

ふいに体を返し、僕を覗いたルシファーは、なんだかとても悲しい顔をしていた。

「ごめん、言い過ぎた——」

「君の、言う通りだ……」

「きみは、僕とお喋りしたいんだ」

「……そう」

「いいよ、それでいい」

彼は、僕を強く抱きしめた。

その体を引き寄せると、浮力のせいかな、彼は軽々と腕に収まった。

「……僕も、きみには、難しい？」

僕は、首を横に振った。

「……よかった——」

「だけど君は、いろんな顔があつて、僕の知る限り、最も理解できない不思議な人だ……」

「……」

「……だから、たぶん、惹かれるし、知りたいと思う」

見開いた目は、メイクが消えかけてもなお大きく、そ

して、なんだか困ったように笑った、ように見えた。そして僕は、そうするべきだと思つて、恐らくルシファーは、そんな僕を察して、僕らは、唇を重ねた。

ジェットバスを止めて、雑音を消した。僕らが立てる水音と、口づけの隙にこぼれる苦しそうな吐息だけが聞こえていた。

すべらかで、柔らかに跳ねる体は、僕の腕の中で、波間を漂う葉っぱみたいに滑った。腕に力を込めるほど、手からすり抜けてしまいうで、僕は、無我夢中で彼を抱いた、というより、しがみついていた。

「僕も、キスマーク、つけたい——」

「いっぱい、して……」

左の肩には、先客の歯型があつた。だから、右の肩に噛み付いて吸った。物足りない気がして、そのまま首筋を噛んで、鎖骨を吸つて、乳首を吸った。それでも、他人の痕のほうが多いから、目につく限りの肌の白い所を吸った。

そのたびに彼は、僕の髪を撫でて、頬を撫でて、顔が近くにあれば、頬を引き寄せて、額やまぶたや頬や鼻に口づけをくれた。

彼をどう抱いていたのか、もしかしたら抱かれていたのか、どう導かれたのか、よくわからない。

浴槽に面した窓には、水色の空と、よく知った金融街が広がっている。

窓についた彼の両手に僕の両手を重ねて、彼の背に唇を押し付けて、無心で腰を前後していた。

薄青の大理石の窓台に口づけでもするように、うなだれた唇から、切ない呻きのような声が細々と漏れ続けている。

尻の中は、一旦交われれば女性器とそう変わらなかった。それよりもぎつく、妙に硬い所を擦れば彼は大きく喘ぎ、一段と狭い奥の窪みに亀頭をねじ込めば、その背の翼が飛び立ってしまいそうなほどしなつた。それは、本当に生きているように綺麗で、誰かの痕も気にならなくなる。夢中で腰を打てば、赤らんでいく背はます

ます生きて、僕を圧する中は焼け付くほど熱くなつた。「…い、ぐ、いぐ…つ、い、ぐ…」

体が深く交わる度に、彼は、うわ言のように「いく」と口走る。その声一つ、爪先の動き一つとつても、男娼さながらに乱れたり、僕を一層焚きつけるような素振りはどこにも見えない。

彼の意はわからない。だから、僕は、彼が見たいと思う。体を繋げたまま、彼の体を仰向けに返してみる。

僕の角度がよくなかつたのか、彼は苦しく呻いて、浴槽の縁に崩れ落ちるように横たわつた。

腹に倒れたペニスが、僕の腰に合わせて跳ねていた。腹から胸はひくひくと震え、切なく開いた唇から、上ずる吐息が溢れていた。

「…気持ち、いい？」

ルシファーは、何か、悔しそうに僕を睨んだように見えた。ほとんどメイクが落ちた腫いっぱいに、涙が溜まつていた。

彼をよくしなければ。その一心で、彼が腰を浮かせ、

体をよじるほど喘ぐ所を突いた。

「も、もおっ…」

強くしがみつかれて、首から背に鈍い衝撃が走った。彼を抱き、掴んだ腰を押さえながら腰を打ちつける。腕の中で、大きく跳ねた体が、硬直する。

「——ぐッ……」

腹で押しつぶしたペニスが脈打つのを感じながら、僕も、彼の中に射精する。

「あ、あ、あ…」

引き寄せられるように、快楽に喘ぐ唇を重ねた僕らは、切れ切れの吐息を奪いながらキスをした。

体を離すと、彼のしぼんだペニスから僅かな精液が滲み出た。

胸から腹へ唇で這い下りて、亀頭を口に含んでみると、彼は「うう」と腰を反らした。

強く吸って、しょっぱいような残滓の味を知る。ピアスを舌で揺らせば、甘く呻いた彼は、僕に手を伸ばした。

「君の尻は、すぐく気持ちよかった、それと、精子は薄くて、あんまり臭くなかった——」

「だまって」

僕を睨んだルシファーは、どういうわけか、辛そうにくしやりと顔を歪めた。

「どこか、痛い？」

「だまって」

乱暴に髪を掴み、頭を手繰り寄せて、僕らはまた、キスを重ねた。

何かに憑かれたように、恍惚に痺れた舌を吸い合う僕らは、本当に、セックスをしているような気がした。

ルシファーの胸を枕にして、バスタブの浅いステップに寝転んでいた。

彼は僕の胸に手を置いて、体毛を指先で引つ張ったり梳いたりして遊んでいる。

ぶくぶくと僕らをくすぐるジェットバスが気持ちよくて、至福だと思った。

「このぶくぶく使ってファックするのも、きもちい」

「どうやって？」

「おちんちんに当ててる」

「湯船の中で？」

「もちろん」

「お尻に水が入る」

「案外平気」

「…僕は、本当は、セックスも、よくわからない」

彼は、僕の頭を小動物にするように優しく抱いた。

髪をいじられると、頭皮も気持ちよかった。

「何をすればいいのかも、ひとりでするものじゃない

ことも、わかってる」

「ウン」

「…だけど、オモイヤリが、よくわからない」

「…」

「…さっきの君は、楽しそうじゃなかった——」

「そんなことない」

彼が、僕の頭を唇を押し付けるのを感じた。これも、

温かくて気持ちよかった。

「…だけど、本当に、セックスしてるみたいだった——」

「したよ」

「…」

「した」

「うん」

「おいで」

「…」

体を起こすと、ルシファーは僕を強く抱きしめた。

すべすべした肌がとても気持ちよくて、僕は、これだ

けでも満たされるように思えた。

「君が全然男娼に思えなくて、こうしてぼーっとして

る時が、一番いい」

「ウン」

彼は、なんだかたたくさん頷いて、僕をもっともっと強

く抱きしめた。

風呂から出ると、ルシファーはそそくさとメイクをして男娼の顔に戻った。

少し残念に思ったが、仕方がないのでだろう。

そして僕は、3時間ほど昼寝をした。

昼過ぎからは、朝食の残りをつまんだり酒を飲んだりしながら、ニンテンドーのゲーム機をテレビに繋いで遊んだ。

「ココでゲームなんてしたことない」とルシファーは笑い、手間取っていたから僕がセッティングした。さすがにこんな物まで用意されているとは思わなかったが、僕にとっては、寝室のチェストに山程取り揃えてある大人のおもちゃより数倍ありがたい。

ルシファーが「マリカならできる」と言うから、プレイすることにした。

彼は「絶対負けない」と自信まんまんにテーブルに足を乗つけて、僕も、真似をして足に乗つけた。

初戦、僕は彼に大差をつけて勝ち、彼は「コントローラーが使いづらいせいだ」と悔しがった。だから、次

のカップでハンデのために速度の出ないマシンを選んだのに、それでも僕が勝ち続ける。

ついに不貞腐れてしまった彼は、レースが終わるたびに唇をへの字に結んで、僕を憎たらしげに睨んだ。

そのたびに僕は「ごめん」と謝って、彼は大人気なく「タバコ箱で許す」と膨れた。

「わかった」と返事をする、彼はフンと顎を上げて僕を見るから、キスをする、と機嫌が直った。

キスは、唇を雑にぶついたり、掠めるだけだったり、フェイントで彼の鼻の頭にしり、唇に噛みつかれたり、と、じゃれているだけだった。

それでも、キスの後に向けられる笑顔はとても作り物には見えなくて、それがなんだか嬉しくて、僕はいつまでも、レースで彼を負かし続けた。

楽しい時間ほど、過ぎるのは早い。

タイムリミットの、16時。

ルシファーは、今夜も仕事があると言っていた。

エンタランスのドア前で、彼は前回のように、僕の身だしなみをチェックして、整えてくれた。

「いいんだ、帰るだけだし」

彼は「そう」と言いながら、僕の左側頭部の髪の乱れを直している。

「ありがとう…今日は、もつと最高の夢だった」

「ウン、その分“高い”よ」

彼は、満悦といった顔でニコニコしていた。

「毎日、こうだったらいいつて思った」

「…ほんとに」

彼の苦笑いが、何を意味しているのかわからなかった。

「これは、たぶん、余計なお世話だと思うけど…」

「ン？」

「体に、気をつけて」

そう口にした時、前回の別れ際、彼が「気をつけて」と言っていたことを思い出した。そしてこれが、彼と僕の、最適な別れの挨拶なのかもしれない、と思った。

「…ありがと」

「じゃあ」とドアへ体を返そうとした時、ルシファーに腕を掴まれた。

何？と聞く前に、彼は僕を抱きしめていた。

「どうしたの？」

彼の背に腕を回すと、温かった。

そして彼は、僕に、長くも短くもないキスをくれた。僅かな湿りで張り付いた唇が、離れ難いようにゆつくりと剥がれた。

「これは、サービス」

彼は、なんだかぎこちなく笑った。

「…わかった」

「…」

「じゃあ、また」

ドアを出て、閉めるその隙間から、ぎこちなく笑ったままの彼が、俯くのが見えた。

レセプションには、例の支配人代理がいた。

前回同様、事務的に会計を済ませ、明細の詳細を見ず

に胸のポケットにしまった。

「次回の予約はいかがいたしますか？」

「頼みたい、ルシファアの、直近の空いてる夜」

「少々お待ちください」

支配人代理は無言でタブレットを操作し、しばらくして「来週の火曜にご用意ができます」と言った。

「そこで、よろしく」

「かしこまりました」

「…申し訳ない、できれば僕には『ご用意』って言葉は使わないでほしい、規定かもしれないが…」

「…かしこまりました」

支配人代理は、一瞬怪訝な顔をした後で、慇懃に承認した。

「火曜に可能です、とかでいい」

「わかりました」

「じゃあ」

ルシファアは、水曜が休みと言っていた。翌日、今日のように延長はできないかもしれない、それでも。

そんなことを考えながら、エントランスのリフトに向かった。

リフトを待ちながら、『ご用意』という言葉に反芻していた。ご用意されるのはルシファアではなく、『サービス』全般で、恐らく深い意味はない。それでも、その、商品然としたワードを不快に感じた。

リフトの中で、ルシファアの『サービス』を思い出していた。あんなことをすれば、客が離れるはずがない。悪い男だと思った後で、それは単に彼のやり方で、思わせぶりであるほどうまくいくのだと自分に説いた。そして例外なく、彼の思う壺に違いない僕は、また彼と、マリオカートをできる日を心待ちにしている。ガーキンの外に出て、空腹を覚えた。出る前に、彼と何かを食べればよかったと残念に思った。そして僕は、繁華街へ向かった。

* * *

翌週の火曜日。仕事を終え、夕食も摂らずにアクアブルーへ向かった。

レセプションで僕を出迎えた支配人代理は、僕の顔を見るなり、固い声で「ルシファーは辞めました」と告げ、「大変申し訳ございません」と詫びた。

「辞めた」の意味が瞬時に理解できなかった僕は、しばらく突っ立っていた。

「他の者でよろしければ……待たせております」

よろしければ、の後に、「ご用意」と言いかけた彼の顔は、事務的に申し訳なさを取り繕っているに過ぎない。

「すぐに、連絡してほしかった」

「申し訳ございません、こちらからは連絡を差し上げない規定がございます」

「どうして辞めたの？」

「申し訳ございません」

「いつ？」

「申し訳ございません——」

「もういい、今日はキャンセルしたい」

「承知いたしました」

支配人代理はあっさりとタブレットを操作し、僕の予約を取り消した。

踵を返すと、「次のご予約は」と呼びかけられた。

「…退会、したい」

「…早急、かと」

初めて、彼の声が動揺するのを聞いた。

「手続きなんかは後日する、また連絡する」

「かしこまりました」

ココを出るリフトを待ちながら、ルシファーが辞めた理由を考えていた。見当がつく理由を飲み込もうとすれば、酷く息苦しくなる気がした。

リフトの中で、ルシファーが話していたことを思い出していた。

ガーキンを出た僕は、僕のオフィスの車止めに向

かった。

キャストの個人的な話は、嘘だと思え。ルシファーはそう言っていた。それでも、調べずにいられない。

カムデンには、ステーブルズというマーケットはあっても、ライブハウスのようなものはなかった。そして、マーケットとは逆方向、カムデン・タウン駅の周辺に、ナイト・クラブとジャズ・クラブ、そしてブルース・クラブの3軒があった。

いてもたってもいられず、カムデンに車を向けていた。赤信号で停車するたびに、馬鹿げてると自分に呆れ、底のない落とし穴に落ちていくような心持ちになった。

それでも、ハンドルを別方向へ切って、彼のいない日々に戻る気になれなかった。

ホームページを見る限り、ナイト・クラブとジャズ・クラブは規模が大きく、スケジュールも先まで詳しく

知ることができた。そして、どちらも、土曜に特定のバンドやシンガーが出演している事実はなかった。

一番小さい規模のブルース・クラブは、ライブ・ハウスというより生演奏を楽しむレストランの趣が強い。曜日ごとにイベントが決まっていて、土曜はジャム・セッションが行われている。彼の名前などどこにも見えてなくても、僕は、このクラブへ向かった。

ブルース・クラブに入ると、フランクな受付の女性に「ご予約は？」と聞かれた。

「申し訳ないんだけど、バンドや出演者のブックキングをしている人か、この辺りのミュージシャンに詳しい人がいたら、話をさせてもらえないかな？」

「出演希望？」

「違うんだ、人を探してて、シンガーで……」

僕が探しているのは、架空の歌手だ。わかっていても諦められなかった。

彼女はぱちぱちと賢そうな目を瞬くと、「ちょっと待って」と奥に引っ込み、ブックキング担当だという中年

の男を連れて戻った。

彼自身もミュージシャンであることがわかるなりに、虚しい期待はにわかに膨らんだ。

「忙しい所申し訳ない、人を探してるんだ、シンガーで——」

「どんな奴？」

彼は気さくそうだったが、僕を訝しげに見ることを隠そうとはしなかった。

「僕はこういう者で」と名刺を渡し、続けた。

「名前はルシファー。年齢は40前後、若く見えるかもしれない：黒髪の白人男性で目が大きい、瞳の色は灰青で、身長は180弱の筋肉。パンク風か、ゴスっぽい感じで、アイメイクをして……」

自由で、自信家で、率直で、偏見がなく、愛嬌があつて、無邪気で、可愛らしくて、優しく、色気があつて、甘えるのがうまく、タフで、メンタルがたくましい……。僕の知る「男娼」の人物像は、言うべきではない気がする胸にしまった。

「どんな歌を歌ってる？」

男の問いに、言葉が詰まった。

「……」

「……とにかく、ルシファーなんて奴は聞いたこともない」

「そーね、ルシアンなら知ってるけど」

受付の女性が、横から口を挟んだ。

「ああ、特徴は似てるな」

男の言葉に、息が詰まった。

「詳しく聞かせてもらえろ？」

「ルシアンはオルタナとかグランジとか歌ってる……ポスト・パンクといえばパンクかもな」

「特徴は似てるけど、メイクはしてないよ」

彼らの言葉に、胸が高鳴った。

「ここに出演する？土曜日とか——」

「いや、うちには年に数度だ」

「彼は普段、ケイヴに演てるはず」

「それ、どこ？」

「そのマーケットの向こう側、高架下のクラブ」

「土曜日かな…?」

「そこまではわからない」

「ありがとう、行ってみる」

礼のチップを渡そうと懐を探ると、男はやめてくれと首を振った。

「知らないよ、客として来てくれれば十分だ」

「そうする、親切にどうもありがとう」

彼らに礼を言い、はやる気持ちを抑えて店を出た。

ケイヴは、彼らが教えてくれた通り、ステイブルズ・マーケットの裏の高架下にあつた。古着屋の脇の階段を降りた地階にあり、規模は先のブルース・クラブの半分程、テーブルが20程度のささやかなクラブだった。入り口の簡素な看板は見逃しやすく、そこにあると知らなければ一生辿り着けなかつただろう。

覗いてみると、小さなステージではバンドが歌っていた。レストランというよりダイナーの趣で、ステージ

対面のバーカウンターに立ち、バーテンダーらしきタトゥーだらけの青年に声をかけた。

「ちよつといいかな?」

「ご注文は?」

聞こえないという素振りをした彼に、声を張った。

「ハーフパイントのロンドン・プライド、1つ」

渡された酒に口をつける前に、聞いた。

「ルシアンって知ってる?」

「知ってるよ」

「ここで歌ってるって」

「ああ、今日が出てない」

エールを一口舐めて、深呼吸をした。

「次は、いつ出るかな?」

彼はスケジュールらしき紙に手に取ると、めんどくさそうに眺めた。

「…来週の、土曜だ」

「なんてバンド?」

「SLEEPLESS TOWN」

「ありがとう」

エールをもう二口飲んで、ケイヴを後にした。

* * *

翌週の土曜。日が暮れる頃、カムデンに向かった。

ケイヴに入ると、よく知った気がする男がステージに立っていた。薄暗い店内の、暗い青のライトに照らされて、上手くはないが下手すぎもしないバンドの真ん中で、彼だけは、白く光って見えている。

僕は、先日のように、ステージ対面のバーカウンターに掛けて、彼を眺めていた。

ルシアンという名のシンガーは、僕の知る男娼ではなかった。手指にアクセサリーはなく、黒いタイトなTシャツにジーンズ、スエードのエンジニアブーツの格好はまるで気取りが無い。かろうじて、耳のピアスだけはそのまま、ふと湧き上がる別人かもしれないという疑念と不安を払拭できた。

メイクはせず、悲哀や絶望をたんたんと歌う素顔には、見たことがない表情が浮かんでは消えていく。力があるが、どこか物寂しい声は、泣いているように聞こえた。

そして、僕に気づいたルシアンは、ほんの瞬間、微笑んで、歌を続けた。

そして、残りの9曲が終わるまで、彼が僕を見ることがなかった。

SLEEPLESS TOWNがライブを終え、店内が明るくなった。次のバンドがステージ準備を始めた頃に、ルシアンと彼のバンドメンバーが現れ、空いているテーブルに掛けた。

すぐに声をかけるべきか、迷った。それでも、ギネスの残りを飲み干して、彼に向かった。

「失礼、少し、いいですか…」

正しい声のかけ方がわからなかった。

バンドメンバーが一斉に僕を見て、数拍遅れて、ルシ

アンが僕を見上げた。

「…やあ、デイヴィッド、久しぶり」

彼の朗らかな声に、じろじろと僕を見るバンドメンバーの空気が和らいだ。

「ダチ？」と聞いたギターの男に、ルシアンは「そう、地元の馴染み」と笑った。

そしてルシアンは「ごめん、もう行く」と席を立ち、「出よう」と僕の腕を引っ張った。

外へと続く防音扉を出る手前、振り返ると、バンドのメンバーは既に談笑を始めていて、そして、次のバンドがステージで歌い始めた。

ケイヴの外に出ると、夜が更けた街には霧雨が舞っていた。

革のジャケットを羽織ったルシアンは、何も言わず、スタスタと駅の方へと歩いていく。

「待って…」

小走りで彼を追い、彼の横を歩いた。

「ルシアン…？」

「芸名」

彼は、バツが悪そうな顔で笑った。

なんだか落ち着かず、そわそわした気持ちになるのは、メイクのないまっさらな顔が、一層美人に見えるからかもしれない。

「…君は、ルシファーとかルシアンとか、天使っぽい名前が多い」

「ルシファーは墮天使だし廃業した、ルシアンなんて名前の天使はいない」

「つぼいつて言った——」

「マイケル」

「…」

「僕は、マイケル」

「わかった」

「メシ、奢って」

「うん」

僕らはそのまま、ハイ・ストリートを南下して、例の

ブルース・クラブへ向かった。

この夜、ブルース・クラブの客の入りは半分ほどだった。ここを選んだのは、先週の礼のつもりと、遅くまで営業しているのを知っていたからだ。

ステージでは、初老の黒人男性がギターの弾き語りをしていた。うるさすぎない店内が、ありがたかった。

「この店、知ってるの？」

「世話になった」

「世話？」

「ルシアンの手がかり」

「そう」

テーブルについたマイケルは、ギネスとサーロインステーキとシーザーサラダを頼んだ。僕は、ジンジャエールと水とサーモンステーキを頼んだ。

「飲まないの？」と驚く彼に、「車で来たから」と答えると、彼は「そう」と笑った。

「…なんだか、別人に見える」

「人にはいろんな顔がある、ガーキンと同じ」

「…やつぱり、メイクしてないほうがいい」

「あんま言わないでくれる？ ハダカにされた気分だ」

苦笑して、彼はサラダをつついた。

「…君も、裸は恥ずかしい？」

「僕にはふさわしくない？」

彼の笑顔が強張った気がして、焦った。

「違う、そんなつもりじゃない——」

「ちゃんと恥ずかしいよ、これでもね」

「そう…」

彼が「うまいよ」とどつさり野菜を刺したフォークを差し出したから、食べた。

メインディッシュを食べている間、彼も僕も、話をしなかった。

僕は、この、マイケルと名乗る彼と再会が叶っただけで、言葉にしがれないもので胸がいっぱいで、あまり食が進まなかった。

見慣れぬ顔は、どれだけ見ても見飽きない。目が合う

たびに、彼は「食べづらい」と顔を背けて、照れ笑いのようなものを浮かべた。だから、ますます目が離せなくて、彼もますます食べづらくなり、結局、彼もあまり食が進まないようだった。

「なんで…辞めたの？」

彼のステーキの残りが3分の1になったところで、僕は、口を開いた。

ゆっくり酒に口をつけたマイケルは、なんだかきこちなく笑った。

あの二度目の別れ際、同じような顔で笑っていたルシファーを思い出す。

「好きでもないヤツの恋人ヅラして腰振るのが馬鹿らしくなっただけ」

さりとて吐き出された言葉に、ドキリとした。

彼に「本命」ができたことは、もはや疑いようがなかった。

「…それが、君の仕事だ」

そう言ってみた後で、僕は、何か辛い気持ちになった。

「…それに、もう体力的にも限界きてたし」

「…」

「潮時、つてやつ？」

「そうか——」

「ごめん、急だった…きみの予約、あつたのに…」

「…いいんだ」

本当は、よくなかった。本当は、アクアブルーでそうしたように、話をしたり、ゲームをした時のような時間を過ごしたかった。

だから、言わずにいられなかった。

「僕は、君と話したり、ゲームをしたりしたい…」

「…」

「だから、君を探した…」

「…」

「でも君はもう、そういう人じゃなかった」

「…」

「付き合ってくれて、ありがとう」

「…」

「送ってく——」

「きみん家、あのゲーム機あんの？」

彼は、なんだか難しい顔をしてポテトをつついていた。

「…ない」

「行こう」と彼は立ち上がり、グラスの残りを飲み干した。

「どこに？」

彼は、「きみん家」とニコニコしている。

「…どうして？」

「もうガーキンは使えないし、僕ん家は人を入れたくない、だからきみん家か、それか、どっかのホテルか」

「…わかった」

僕も席を立ったが、彼の考えていることはよくわからなかった。そして、やっぱり彼は不可解だと思いがら、それでも、もう少し彼と過ごせることを嬉しく思しながら、会計を済ませた。

自宅に向かう車の中で、助手席のマイケルは機嫌がよ

さそうに見えた。窓枠に肘を置いて頬杖をつき、フン
フンと鼻歌を歌っている。とりとめのないメロディは、
知っているものもあれば、わからないものもあった。

「…君が歌ってる時、すてきに見えた」

「そう？」

「本当は、音楽もそんなに得意じゃない——」

「好きか嫌いかでいいんだ」

「…いいと思った」

「ありがとう」

「泣いてるみたいだった——」

彼はフンと笑い、「家、どこ？」と話を変えた。

「ケンジントン」

目が合うと、彼は「前見ててよ」と笑い、「タバコ吸っていい？」と聞いた。

灰皿を示すと、彼はタバコに火をつけた。

「…君は、個人的な話は嘘っぱちだって言ってた」

「ウン」

「なのに、嘘じゃなかった——」

「嘘もついてた」

彼は、さめた横顔でタバコを燻らせている。

「…どうして、嘘をつかなかった？」

「ついてほしかった？」

首を横に振ると、長々と煙を吐く口元が、微笑んでい
るのが見えた。

「…ケイヴは、グーグル・マップじゃ探せなかった」

「よく見つけたね」

くつくつと低く笑う声が、心地よかった。

「君の嘘じゃない嘘のおかげ——」

「ねえ、ちよつとスマホ貸して」

僕のスマホを手渡すと、彼は、何かを手早く操作し始
めた。

「何？」

「アマゾンでゲーム機買った」

「そう」

「明日届く」

「わかった」

楽しそうな声を聞きながら、僕は、車をガレージに入
れた。

* * *

「庶民の夢、つて家だ」

僕のアパートメントに來たマイケルは、リビングから
キッチン、ダイニング、応接間、2階の寝室やバスルー
ム、書斎まで一通り覗きながら、ウキウキとした声を
上げた。

「君だつて、いい所に住んでるんだろ？」

聞いた後で、彼が稼げる仕事を辞めたことを思い出し
た。

「でも戸建てじゃない、フラットだ」

「どこ？」

「カムデン」

「そう」

「いずれ、引き払う」

「どこに行く?」

「まだ探してない」

マイケルはアイランドキッチンと冷蔵庫の中を確認すると、「ボンベイ・サファイアがあるじゃん」と勝手知ったように酒を作り始めた。

カウンターのスツールに掛けて、彼の手際を見ていた彼は、シェーカーに氷と2分の1カップのジンとティースプーンに半分のオリーブジュースを入れ、器用にシェイクを始めた。

「君がバーテンしてるバーなら、行きたいと思った」

「昔、ちょっとやってた、復職しようかな」

「…転職活動中?」

「まだのんびりしてる、蓄えはあるし、多少は運用してるから」

「そうか」

シェイクを終えた彼は、「ベルモットがないけど、いいか」とマティーニグラスの縁から酒を注ぎ、オリーブの実を入れたものを僕の前にことんと置いた。

「どーぞ、あるギタリスト直伝のダーティー・マティーニ」

「誰?」

「秘密」

舐めてみると、オリーブがジンの辛さをまろやかに包み、少ししよっぱい、癖になる味だった。

「強いね」

「少しずつね」

ウイスキーのロックを適当に作った彼は、僕の隣のスツールに掛けた。

そしてしばらく、肩を並べた僕らは、黙って酒を飲んでいた。

彼を探し出してまで話したいと思っていたはずが、実際彼を前にすれば、話したいことは特になかった。

まるで、真空管の中のような静寂に、僕は、酷く居心地が悪くなった。

「…マイケル」

初めて彼の名を口にしてみると、馴染みのない発音に、

彼を少し遠く感じた。

「ン？」

「君は…誰か、いい人ができたの？」

「…いい人？」

彼のグラスの水が、カランとやけに大きな音を立てた。

「売りを辞めたのは、そのせい、だろ？」

「…ウン」

「じゃあ、僕に付き合わないほうが——」

「デイヴィッド」

怒っているように聞こえた声に、反射的に顔を向けると、目の前にマイケルの顔があった。「何？」と開きかけた口を、唇で強引に塞がれた。

冷たい舌が僕をねじ伏せ、冷えたピアスが舌の中心を真っ直ぐ奥へと擦る。背筋がぞくりとして、溜息をつくとき、彼は静かに唇を離れた。

「売りは…辞めたんだろ？」

「そうだよ、辞めた」

頬を包む彼の両手が、柔らかく僕を撫でていた。

「でも、ちゃんと払うよ…キャッシュは手元にないから、すぐには払えないけど——」

「本気で言ってる？」

その顔が、なんだか苦しく歪んでいく。

「もちろん——」

「きみは、ほんとにつ…」

彼は、今にも泣き出してしまいそうに見えた。

「…？」

「きみの奥サンのウンザリがよくわかる」

その声は震えていて、僕は、やっぱり人は難しいと辛く思った。

「…」

「ごめん、ちゃんと言わない僕が悪かった」

「何？」

「僕が悪い、きみは気にしなくていい」

「…どういうこと？」

「デイヴィッド、僕は、きみが好きだからここにいます」

「…」

「売りをやめたのは、きみが好きだからだ」

マイケルの言うそれが、にわかに信じ難かった。筋は通るが、解せないことがあった。

「でも、したら、会えなくなった——」

「だからきみは、僕を探した」

「そう——」

「来てくれると思ってた」

切なく笑う顔を見ると、胸がヒリヒリした。

「ねえ、デイヴィッド」

彼の言わんとすることが飲み込めてきた僕は、頷くことしかできない。

「僕のデイヴィッド……」

「僕は、君がここにいてくれるだけで、すごく嬉しい

——」

「こういう時は、『愛してる』って言うんだ」

「……ああ」

「……」

「……あいしてる」

僕には、愛しているということが、今でもよくわからない。

それでも、彼が、その目にいつばい涙をためて笑っているから、これでいいんだと思う。

「僕は、うまくない……ごめん」

マイケルを抱きしめて、謝って、目眩がするほど口づけを交わしていた。

「わかつてる、勉強すればいい」

僕の耳を喰んで、楽しそうに囁く彼に、あつという間に裸にされた。

彼は、迷子の子供の手を引くように、彼の体へ僕の手足を上手に誘導していった。

ベッドに座り、彼を背後から抱いた。忘れられない、

あの不思議な体臭を嗅ぐだけで、息が詰まるほど胸にこみ上げるものがあった。

僕を振り返り、唇が重なるすれすれの所で、彼が囁く。
「おっぱい触って」

Tシャツを脱がそうとする手を、胸に導かれる。

「シャツの上から」

胸を手のひらに収めてみる。僕の指を跳ね返す弾力を驚掴むと、彼が笑った。

「まあるく揉んで」

円を描くように揉む。彼が舌を伸ばしたから、ピアスを嘸みながら吸った。

「乳首、触って」

指で探ると、固くなつたその形がわかる程、勃っている。

「こんなシャツ…卑猥だ」

「つて、知つてれば、やりたくなる」

尖つた乳首をつついてみると、彼が「爪でかじつて」と囁いた。

恐る恐る引つ搔いてみると、彼は「んん」と僕の胸にしなだれる。

搔き続けているうちに、彼はもももど腰を動かし始めた。眉間に寄つた皺が、苦しく見える。

「…大丈夫？」

「きもちい」

「直接、触りたい」

「まだ…そのまま、摘つまんで、捏こねて」

そつと、布ごと摘んでねじつてみる。

「もつと強く」「こう？」「もつともつと」「こう？」

潰れてしまうと思うほど力を込めていくと、抱いた背が反つた。

「ああッ、いい」

うねうねと揺れる尻が、僕の股を擦る。

気がつけば、僕は、勃起していた。

「直に、触つていいよ」

シャツを脱がし、抱き直した体は、まるで発熱しているように熱い。

「直接触る時は、爪を立てちゃだめ」

微笑む唇に口づけると、早い吐息が僕を急かした。

「どうすればいい？」

「指をワイパーみたいに、引つ掛ける」

「ワイパー」

「指の腹で…そう、それでいい」

弄る乳首は、僕の指がかかるたびに、ぶるぶるとかわいく跳ねた。

「きもちい」

「君の乳首は、本当に、キュートだ…」

「…優しく、摘んで、捏ねて」

そつと、そうすると、彼は「ううん」と呻いて、尻を僕のペニスに押し付ける。

ねじるほど硬く尖っていく乳首の感触に、昂奮を覚えた。抱いた背は汗ばんで、僕の胸にじつとりと張り付いた。

「そのまま…乳首の先を、擦^{こす}って」

「うん」

親指と人差し指で摘んでいては、できない。親指と中指で摘み直し、人差し指で乳首の先端を擦った。

「ンッ…あ!」

彼の腰が大きく跳ねて、胸から腹が不規則にひくつい

た。

「こゝ、いいの…?」

「い、い…」

乳首の先を擦るたび、彼は甘く喘いで、激しく腰を振る。

「君のおっぱい、すごいね」

「おちんちんの、奥がきもちいい…」

「奥?」

おちんちんの奥、の意味はわからない。それでも、彼が喜んでゐるから、繰り返して乳首の先を擦った。単調ではよくない気がして、強弱をつけて、擦る指を早めて、彼が一番喜ぶ触り方を探していく。

「でいういつ、そお、ああ、いっちゃうつ…」

「うん」

強く、指先を押し込むと、彼の腰ががくがくと跳ねた。「アア」と開いた唇から舌を引きずり出し、吸いながら舐めた。彼の胸に浮いた玉の汗を拭いて、もう一度、膨れた乳首をねじった。

「あ、アア」

僕の指に合わせて揺れる尻が、僕のサオを摩^まする。

先走り濡れた亀頭をなすりつける腰も、流れ落ちるほどの汗にまみれていた。

「…でいづいっど、おちんちん、いれて」

「ちゃんと前戯、してない」

「はやく」

「でも——」

「まてない」

「わかった」

彼のジーンズと下着を脱がすと、精液で濡れたペニス
がくたりとこぼれ出した。

あれだけでいけるのかと驚いた後で、彼をいかせた事
実に息苦しいほどの昂奮を覚える。

僕に背を向けたまま、彼は、僕の腰の上にカエルみた
いにしやがんで、尻を揺らしている。

「おちんちん、はやくいれて…」

「うん」

彼の腹を抱え直し、亀頭でアヌスを探った。

「どこ？」

「そこ…」

ずぶと肉を割る鈍い感触に、抱えた背がよじれ、翼が
歪んだ。自らの肉を掻き分けて、僕をずぶずぶと飲み
込んでいく彼は、僕に尻を沈めきつたところであぐん
と天を仰いだ。

「…お、おッ」

「ん、ぐ…っ」

スプリングをギシギシ軋ませながら、白い尻が、リズ
ミカルに僕を吸い込んで締め上げる。腰をくねらせ、
誘い込んだ僕の亀頭で、硬く柔らかなところを擦り続
けている。

「ああッ、あ、そこ、いいッ、ああ……」

振り乱れるペニスから、とめどなく先走りが溢れては
飛び散っている。

「…ここが、おちんちんの、裏…？」

「そお、きもちいい、きもちいいお…っ」

「こりこり、してる」

「おちんちんで、そこ、ついて…」

「…座ってたらっ、しづらい」

四つん這いになった彼を追いかけて、僕は、アクアブルーでしたように、彼を後ろから突いた。

「ああ、ああ、もつと、つよく…」

彼が喜ぶところを、狂ったようにえぐる僕は、まるで野獣のようだと思う。

それでも、僕を啜え込むカラダは、柔らかく、優しく僕をしごきながら、僕の衝動を肯定していた。彼の胸をまさぐり、震える乳首を擦こすってみる。

「あ、ああッ！」

ぎゅうぎゅうと尻が締めまり、シートにばたばたと彼の精液が飛び散った。

シートに崩れ落ちた虚ろな横顔はとても淫らで、僕は、これまで感じたことのない凶暴な劣情を覚えた。

胸から腹を撫で下ろし、ぶるぶると跳ねるペニスを捕まえた。

「ああ、ああ…」

体液を塗り込めながらサオを揉みしただけ、揺れる腰に僕も絞り上げられる。

みつちりと僕を吸引するカラダは、ぐずぐずと濡れた音を立てて、僕を愛していると言っていた。

「ああ、ああ…」

早くも硬さを戻したサオをしごきながら、彼の亀頭を貫くピアスを揺らしてみる。

「ンアあッ！」

手の中でペニスが脈打ち、また、精液が吹きこぼれる。とろりと糸を引く体液を指にすくい、亀頭に塗りたいながらピアスと一緒に擦った。

「ねえ、君…どれだけいくの？」

「ああ、ああッ、でいぐいつ、もつと、してっ…」

握ったサオをしごき上げながら、ぐりぐりとピアスを滑らせているうちに、僕も、たまらなく気持ちよくなる。

「ああ、ああっ…」

ばちばちと肉を打つように、下品にねじ込むペニスの奥で、ねつとりと肉が蕩けていくのがわかる。カラダの境目がわからなくなるほど、僕らは深く交わって、回した腰で混じり合っていく。

夢中で濡れた翼に口づけて、重ねた胸で感じる彼の昂奮を、僕も、追いかける。

「も、もお、おかしくなる…っ」

「あ…あッ」

全身を貫く激しい快感に、息が止まった。

思考が砕けて、彼と繋がっていることしかわからなくなる。

極みに達して、彼の深くに嬉々として精を吐く己の律動と、それを搾り取る彼の収縮と、僕の手の中で迸る彼の精と、鳴咽のような彼の吐息と、抱きすくめた体からこぼれる熱に焼かれる恍惚を、ただ、感じていた。

僕の腕の中で朦朧としている人を、眺めていた。

疲れた眉や、色のないまぶたや、時々小刻みに震える

まつ毛や、記憶よりもクリアに見える瞳の虹彩や、僕を見上げる鼻の頭や、上品な唇や、その小さく開いた隙間から覗く歯や、丸い頬や顎や、耳を、一つ一つ切り取って、アルバムに収めるように、男娼の記憶に上書きしていく。

「…マイケル」

呟いてみると、その名前は、とても大切なもののように思えた。

「…ウン」

僕を見つめる彼は、本当に、嬉しそうに笑っていた。そして、うつとりと目を細めた彼は、「幸せ」と呟いた。その顔は、「嬉しい」ではなく、「幸せ」なのだを知る。

「…僕の、マイケル」

彼が言ったことを真似てみると、「愛してる」よりフィットする気がした。

「ウン」

マイケルはくすぐったそうに笑い、僕の手を探って、手を繋いだ。

僕は、嬉しくて嬉しくて、胸がいつぱいになって、こういう感覚が「幸せ」なのかもしれないと思った。

体を起こしたマイケルは、枕をクッションにして、ヘッドボードにもたれた。

僕は、彼の下腹を枕にして、脚の間に潜り込んだ。

つるりとした肌が心地よくて、頬ずりをしているだけで幸せだった。

「タバコいい？」

いいと答える前に、彼は火をつけていた。

ザワザワという血流を聞きながら、しなやかな腿を撫でているだけで、幸せだった。

「満足できた？」

優しく髪を撫でられたから、大きく頷いた。

「…すごく、気持ちよかった、満足した」

「よかった」

「けど…かなり駆け足だったと思う」

「僕がそうしたから、あれでいいんだ」

彼がひっそりと笑い、腹がふわふわと揺れた。

「まだ、しなきゃいけないことが、たくさんあった――」

「しなきゃいけないことなんてない」

「でも――」

「きみが満足したなら、いいんだ」

彼が、静かに煙を吐くのが聞こえた。

「…本当は…」

「…ウン」

繰り返して、髪をゆったり梳く指が、優しく僕を待っていた。

「…本当は、僕は、君とセックスしなくても、君がこうして、ここにいてくれるだけで、十分幸せなんだ」

「ウン」

「だから、たぶん…君にとつて僕は、物足りない――」

「セックスなんてなかった方がいい」

「…」

「今日は、僕がしたかったからさせた」

「そんな風に思ってない…」

「だからごめん」

「したくなかったわけじゃない…」

「セックスは、したきやすればいいし、したくないならしないでもいい、それでいいんだ」

僕の頭を撫でる手のひらに、温かな力がこもった。

「…わかった」

「ウン」

「…でも、セックスも、幸せだと思った」

「そう」

「…別に、嫌いなわけじゃない、けど、いつ、どんなタイミングですればいいのかとか、そういうのも、本当は、よくわからない…」

「…」

「だから…火曜日と、木曜日と、土曜日にするとか、そういうルールがあったほうが、僕には…フィットすると思う」

「きみの好きなようにしよう…それでも、したくなけ

れば無理にしないでいい」

「ありがとう」

「ン」

「…本当は、君が笑っててくれるだけで…それでいい」

「きみの『本当』が好きだよ」

彼がクスクス笑い、タバコを消す気配がした。

「ねえ、デイヴィッド」

僕の名前を呼ぶ声は、子守唄みたいに穏やかで、温かくて、幸せで、僕は、眠くなってしまう。

「…きみは、僕がどれだけきみを愛しているか、最後までわからないかもしれないね」

「……………」

「それでも、いいんだ」

「…よく、ない」

「きみという時に、一日一回はちゃんと言うから」

「…」

「僕も、きみといるだけで、幸せなんだよ」

「…」

「これが、僕の本当だ」

「…うん」

マイケルは、するりと布団に潜り込むと、僕の頭を抱いた。

彼の肩を枕にした僕は、「おやすみ」を言う前に、ずとんと眠りに落ちた。

* * *

目を覚ますと、昼前だった。

リビングに行くと、マイケルがソファで寛いでいた。

ワードローブを漁ったのか、勝手に僕のナイトガウンを着ているのが、嬉しい。

そして、テレビには国営放送のニュースがつき、彼は新聞に目を通している。

知っている光景に、僕は、ますます嬉しくなった。

「おはよ」

僕に気づいた彼は、ぱつと腰を上げ、僕の首を抱いて

簡単なキスをくれた。

そして、「朝メシにしよう」と、キッチンに立った。

「きみは…自炊なんてしないか」

「君はするの？」

「減多にしない」

そうやってニヤリとした彼は、ありもので簡単な朝食を用意してくれ、僕らはキッチンのカウンターに肩を並べて、シリアルと目玉焼きを食べた。

僕がお茶を淹れ、彼にミルクティーを作り、自分にはコーヒーを作った。彼が、ミルクの量に合格をくれたから、よかつたと思う。

朝食を済ませた後、一緒に風呂に入った。

頭と顔を洗った後で、僕らは、体を洗う順を披露しあつた。彼は、肩から下半身へ。僕は、足から上半身へと洗うから、真逆だった。

体を洗った後、湯に浸かって、抱き合いながら話をした。彼は、こだわりのシャンプーとボディソープの銘柄を教えてくれた後で、臭いやすい所は石鹸で洗う方

がいいと力説した。幸せだった。

14時頃、マイケルが昨夜オーダーしたゲーム機が届いた。

早速セッティングをしようすると、彼が「出かけよう」と言うから、開封をやめた。

「どこに？」

「適当に、食料の買い出し、なんもない」

「わかった」

「あと、僕ん家にも行つてほしい」

「君ん家？」

「そう、PCとかギターとか、服とか、ちよつと持つてくる」

「なんで？」

「少しずつ、引越し」

「そうか」

突然、マイケルが腕を上げ、自分の脇を嗅ぎながら「臭わない？」と僕に聞いた。昨日のままの服が、気になるらしい。

嗅いでみると、臭くはなかった。

「臭くない、けど、君の匂いが濃くなってる」

「…あんまりいい気分じゃないね」

「僕は好きだ」

苦笑した彼はドレッシングルームを探り、僕の香水を一通り確認した。そして、一番好みらしいモルトンブラウンのブラックペッパーをつけると、「これでよし」とジャケットを羽織った。

スパイシーで爽やかなウッディの香りは、男娼ではない今の彼によく似合うと思つた。

そして僕は、彼について、ガレージに向かった。

助手席のマイケルは、昨夜のように窓枠に肘を置き、頬杖をついて、鼻歌を歌っていた。さらに今日は、右足で軽くリズムを取りながら、腿の上に置いた指で鍵盤を弾く真似をしている。

リラックスした横顔を盗み見ているだけで、僕も幸せになる。

「歌っても、いいよ」

「ギャラ取るよ」

「わかった」

「嘘だよ、鼻歌がいいんだ」

「そう」

そして彼は、おもむろに取り出したスマホを覗きながら、口を開いた。

「夜、何食べる？」

「…まだ考えてない」

「じゃあデイナー行こう」

「わかった」

「どつかいい店ある？」

「すぐに思いつかない」

「そう、じゃ、ここどう？」

彼が突き出したスマホの画面には、見覚えのあるレストランのホームページが表示されていた。

「どこ？」

「ガーキンの最上階」

「いいけど、どうして？」

「行ったことない」

「そうなの？」

「『職場』の近くは、あえて使わなかった」

「そうか」

「行ってみたかった」

「じゃあ行こう」

「予約した」

マイケルはニコリと白い歯を見せて笑い、スマホをしまうと、また、鼻歌を歌い始めた。

まるで、当たり前みたいに彼がそこにいることが、幸せだと思う。

そして僕は、ハンドルを切ってカムデン方面へと車を向けた。

(おわり)

かいせつ

感情・機能が欠落した恋や愛を知らない男と、性愛のプロフェッショナルが恋に落ちるお話です。ロボットみたいなdさんと「Laws of Attraction」風のmさんで想像して楽しんでいただければというもの。

あ、お話中の金額の単位は想像しやすいよう、円のつもりなのでよろしくお願いします。

最終的に「セックスなんてなかった方がいい」ふたりに着地する、過去一年で書いてきた作品の中で最もプラトニックなふたりなのですが、とても好きです。書いてるうちにdさんが可愛くて仕方なくなつて、ついつい長くなつてしまつたくらい。そしてできたお話はとても幸せで、書いた後ほとんどない満足感があり、やりきつた！、もう書かなくていいか？とのんびりしていました。∴が、しばらくして「またなんか書きたいな」と思っている今日この頃です。

(2022年5月26日 pixiv に公開)

あとがき

こちらの本をお手に取っていただき、ありがとうございます。
います。当初このタイミシングで物質にするつもりが
なかったこの本ですが、まとめてみたらかかなりのポ
リウムになってしまい、やっぱりまとめておいてよ
かったです。また、この本の「アクアブルー」まで、
Pのお話のガイドpdfでかなり詳細な説明等をして
いるので、ここでの解説はかなりざつくりしたものに
なっています。ガイドpdfを手手してないので読みた
いという方は、ご連絡いただければ送付いたしますの
でお気軽にお問い合わせください。

前頁でも少し書いたように、「アクアブルー」を書い
た後、もう書かなくていいかという気持ちだったの
ですが、結局なんだかんだ書きたくなっています。やつ
ぱりお話を書くのは楽しいので、これからも気が向い
たらばち書きしたいなと考えている昨今です。

ごに關して、意識的にはつきりと「アクアブルー」

が大きな区切りになったので、次に新しいものを書く
時は、クロアジの「千夜一夜物語 (AU)」がそうだつ
たように、過去作をあまり意識せず、心機一転とい
う感じで書いていきそうだな〜と思っています。

あ！「千夜一夜物語 (AU)」は「Hummingbird」の
Nighbirdからできた作品なので、CPは違えど姉妹
作という感覚です。npで読みたいんじや〜という方
は、千夜一夜〜をnpで想像して楽しんでもらっても
構いません、お好きなように。で、発端のNighbird
のふたりのお話、ある程度想像はしていますが（もち
ろんストーリーも細部も別物です）、形にするかは現
時点でも未定です。やっぱり死別を書くのはしんどい
で：もしかしたら気が向いて書くかもしれません。。
最後に、届くかわかりませんが、感想やマシユマロ等
くださる方、ありがとうございます！楽しんでいた
だけだけで、私はとても幸せです！

2022年10月 めち

2022 年に pixiv に公開した作品を
名前をモデルに変えて再録しました。
全て完全な幻覚であり、実在の人物や団体とは一切関係がありません。

The unofficial fanfiction novel of dtms

Just Another Life

めち

発行日	2026 年 1 月（受注頒布版）
著者	めち @akaimechi / pixiv id : 1515
発行	アカイカゲロウ
連絡先	mechiko99@gmail.com / https://mechi.life
印刷所	製本直送 .com 様

※オークションサイトやフリマサイトなどでの転売を禁じます。
※使用目的のいかんに関わらず、弊誌からの無断転載・複製を禁じます。
※処分する際は、お住まいの地域の資源ごみの日などに目立たない形で処分するか、
専門の業者に依頼してください。
※落丁・乱丁がありました場合、お手数ですが当方までご連絡ください。